

一四世紀末—一六世紀初頭エジプトの 大カーディーとその有力家系

伊藤 隆 郎

【要約】 一四世紀半ばから末にかけての時期に、エジプトの社会や経済は大きく変化したとされている。それ以後の時期、エジプトの大カーディーにはいかなる人々が任命されたのであろうか。彼らの就任条件を検討してみると、(A)学識や能力が認められること、(B)前任者のナードイブであること、(C)賄賂を用いること、(D)有力者とのコネないしは有力者からの推薦があること、(E)大カーディー経験者の親族を持つこと、がその主要なものであったことがわかる。その中でも特に重要な要因の一つであった(B)親族関係の具体的なあり方は、この時期に大カーディーを輩出したブルキーニー家とシフナ家の事例から明らかとなる。両家に共通して指摘できることは、出身地域を活動拠点に法や宗教・教育に関わる職を家系の専門職とし、それらを多く親族間で伝統的に確保していたことである。このような有力家系の存在は、ウラマーの社会的流動性が限られていたことを示唆するものである。

史林 七九巻三号 一九九六年五月

はじめに

一二六五年マムルーク朝治下のエジプトで司法制度に改革が行われた。^①それまで大カーディー (qādī al-quḍāt) には、シャーフイー派の者が一人だけ任命されていたのだが、以後ハナフィー派、マールク派、ハンバル派の三法学派からそれぞれ一人ずつ、合わせて四人が任命されるようになったのである。以後この四人の大カーディーを頂点とする体制は一六世紀初めにマムルーク朝が滅亡し、エジプトにオスマン朝の支配が確立するまで存続した。^②

大カーディーたちは、司法組織のトップとして活動するだけでなく、広くウラマーを代表する者としてカリフ、スルタンの即位式やスルタンに関わる冠婚葬祭に列席し、雨乞いやペスト退散の祈りを捧げるなどしていた。^③近年、イスラム法やその担い手たるウラマーに関連する研究が活発になってきているが、このようにウラマーの代表的な存在であった大カーディーに関して、社会におけるその活動や役割を中心に、これまでいくつもの研究で論じられてきた。^④しかし、一体いかなる人々が大カーディーに就任したのかという基本的な問題については、従来、意外にも本格的な研究に乏しい。こうした研究として挙げられるのは、わずかに Escoffier によるもののみである。^⑤彼は、年代記のほかに、特に最近組織的に利用されるようになった人名辞典を用いて、大カーディーたちの出自・経歴の特徴やその就任条件をはじめて明らかにした。だが、その検討対象の時期は一四世紀末までに限られている。この頃にエジプトの社会、経済が大きく変化したとし、それを境にマムルーク朝時代を前期と後期に分けるのが、現代の多くの研究者たちの間で一致した見解である。彼が対象時期を限定したのは一つにはそのためであろうが、直接的には、一四世紀末以後の時期の大カーディーに関して既に Schimmel^⑥や Petry^⑦による研究があるためであるという [Escoffier 1984: 3]。しかしながら、両研究やその後なされた研究によっても、当該時期の大カーディーたちの経歴や就任条件が十分に解明されたわけではない。

本稿はささやかながら、このような研究上の空白を埋めようとする試みの一つである。但し、Escoffier と同じように大カーディーそれぞれの経歴すべてについて論じることは、本稿に当てられる紙数では不可能である。さしあたり、ここでは論点を限定しなければならない。Escoffier によれば、大カーディー就任者の中に先任の大カーディーと血縁、姻戚関係を有する者が多く見られるという。そこで、まずこの時期の大カーディー就任の条件を概観して、一四世紀末以後でも親族関係が重要な要因であったことを確認し、次にその具体的なあり様を、大カーディーを輩出した家系を取り上げ、検討することにした。

なお、本稿で利用した主要史料とその略称は次の通りである。

- BZ: Ibn Iyās, *Badā'i' al-Zuhūr fi Waqā'i' al-Duhūr*. 5 vols., Wiesbaden, 1960-75.
- DH: Ibn al-Ḥanbalī, *Durr al-Ḥabab fi Ta'riḫ A'yān Ḥalab*. 2 vols., Dimashq, 1972-4.
- DK: Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *al-Durr al-Kāminā fi A'yān al-Mi'a al-Thāminā*. 4 vols., Bayrūt, 1993.
- DL: al-Sakhāwī, *al-Daw' al-Lāmi li-Ahl al-Qarn al-Tāsī'*. 12 vols., Bayrūt, n. d.
- DM: Abū al-Faḥl Ibn al-Shīḥna, *al-Durr al-Muntakhab fi Ta'riḫ Mamlaka Ḥalab*. Tokyo, 1990.
- DR: al-Sakhāwī, *Dhayl 'alā Raḥ al-Isr. al-Qāhira*, 1966.
- GKS: al-Ghazzī, *al-Kawākib al-Sā'ira bi-A'yān al-Mi'a al-'Ashira*. 3 vols., Bayrūt, 1979.
- IG: Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Imbā' al-Ghunn bi-Abnā' al-'Umr*. 9 vols., Hyderabad, 1967-76.
- IN: al-Ṭabbākh, *Ṭiām al-Nubalā' bi-Ta'riḫ Ḥalab al-Shahbā'*. 7 vols., Ḥalab, 1988.
- KM: al-Maqrizi, *Kitāb al-Mawā'iz wa l-Ṭibār, bi-Dhikr al-Khiḫā' wa l-Āḥkār*. 2 vols., Būlāq, 1270 A. H., repr. Bayrūt, n. d.
- KS: —, *Kitāb al-Sulūk bi-Ma'rifā Duwal al-Mulūk*. 4 vols., al-Qāhira, 1939-73.
- MS: Ibn Taghri Birdī, *al-Manhal al-Safī wa-l-Mustawfi ba'd al-Wafī*. 7 vols., al-Qāhira, 1985-1994.
- NZ: —, *al-Nujūm al-Zāhira fi Mulūk Miṣr wa-l-Qāhira*. 16 vols., al-Qāhira, 1963-72.
- RI: Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Raḥ al-Isr 'an Quḍāt Miṣr*. 2 vols., al-Qāhira, 1957-61; RIa: ms. Bibliothèque Nationale Arabe 2149; RIB: Bibliothèque Nationale Arabe 5893.
- SA: al-Qalqashandī, *Subḥ al-'Ashā fi Sinā'a al-Inshā'*. 14 vols., al-Qāhira, 1963.
- SD: Ibn 'Imād al-Ḥanbalī, *Shadharāt al-Dhahab fi Akhbār Man Dhahaba*. 8 vols., al-Qāhira, 1350-51 A. H.
- TS: Ibn Qāḍī Shuhba, *Ṭabaqāt al-Shaḥīryya*. 4 vols., Bayrūt, 1987.

Wiet: Wiet, G., "Les biographies du Manhal Safi," *MTE*, 19 (1932)

- ① この過程と意義に関し、Escovitz, J., "The Establishment of Four Chief Judgeships in the Mamluk Empire," *JAOs*, 102-3 (1982); Nielsen, J. S., "Sultan al-Zahir Baybars and the appointment of four Chief Qadis(653/1265)," *SI*, 60(1984); Jackson, Sh. A., "The Primacy of Domestic Politics: Ibn Bint al-A'azz and the Establishment of Four Chief Judgeships in Mamluk Egypt," *JAOs*, 115-1 (1995) が論じている。なお、翌年にはシリヤ地方への同様の改革が行われたが、本稿はエジプトの大カーディーのみを対象とするので、以下単に「大カーディー」と記す場合は、すべてエジプトの大カーディーを指す。
- ② ノスマン朝治下のエジプトでは、ノスマンブルで任命された qādī al-askar によって統轄される司法制度が次第に組み替えられてきたが、この過程を論じたものとして、Schimmel, A., "Kalif und Kadi im spätmittelalterlichen Ägypten," *Die Welt des Islams*, 24(1943), 84-98 (以下「Schimmel 1943」略記); Behrens-Abouseif, D., *Egypt's Adjustment to Ottoman Rule*, Leiden, 1994, 69-85; 熊谷哲也「ノスマン・エジプト初期におけるマドラサ・サリヒーヤとナーイン・カーディー・アシケルの任命」『中央大学アジア史研究』一三(一九八九)がある。
- ③ 両名がどうして例えは NZ: XV, 424-5, エヌト退散の祈りにどうして KS: IV, 488 を参照? その他「即位式」の列席などは年代記と類案に言及されよう。
- ④ Lapidus, I. M., *Muslim Cities in the Later Middle Ages*, Cambridge Mass, 1967 (以下「Lapidus」と略記)が、その代表的な研究である。
- ⑤ Escovitz, J., *The Office of Qadi al-Qaḍi in Cairo under the Bahṭ Mamluks*, Berlin, 1984 (以下「Escovitz 1984」と略記)への他、大カーディーの略歴などの典拠となる史料を列挙した Salhi, K. S., "Listes chronologiques des grands cadis de l'Égypte sous les Mamelouks," *REI*, 25 (1957) (以下「Salhi 1957」と略記)があり、本稿の関心の上から大いに参考になるが、得られた情報に基づいた分析は行われていない。なお本稿表1作成の際の典拠は、概ねこの論文で挙げられている史料、および任命時の年代記の記述である。
- ⑥ Schimmel 1943. 一四世紀末以後の大カーディーに関して年代記からの情報をもった全般的に論じたものだが、個々の経歴やその特徴にはほとんど触れられていない。
- ⑦ Petry, C. F. and S. Mendenhall, "Geographic Origins of the Civil Judiciary of Cairo in the Fifteenth Century," *JESHO*, 21-1 (1978). 表題の時期の大カーディーを含む司法関係者の出身地の分布を分析した研究であるが、大カーディーのサンプル数は少なく、しかも分析結果とその表のみで典拠が示されており、不十分な検討しかなされていない。
- ⑧ Petry, C. F., *The Cretian Elite of Cairo in the Later Middle Ages*, Princeton, 1981 (以下「Petry 1981」と略記)は、一四世紀末以後の大カーディーの職歴も取り上げられている [231-2, 366-7] など、ここでも十分な検討がなされているとさえ言い難い。

一 大カーディー就任の条件

この時期の大カーディー就任者は九〇名で、就任期間は表1にある通りである。まずその就任条件を見てみよう。

Escovitz によると、大カーディーに就任するための主要な条件として、学識や能力が認められること、前任者のナーイブ (na'ib)^① であること、有力者とのコネないしは有力者からの推薦があること、先任者に親族がいること、が挙げられるという^②。この結果を踏まえ、当該時期についても同じく検討してみると、表1の右側に示した通りとなる。

まず、学識や能力が認められての就任は前期と同様わずかである。しかしこのことは、それらが軽視されていたことを意味しない。大カーディー就任者たちの中に法学の教育を受けていない者は一人もおらず、むしろ学者として当時有名だったと思われる者が多いからである^③。

前期には多かった前任者のナーイブが直接大カーディーに昇任した例は、この時期一二例しかない^④。この変化は、おそらく大カーディー職をめぐる競争の激化がもたらしたものであろう。競争が比較的穏やかであったハンバル派で、その割合が最も多いからである。

逆に、以前にはほとんど見られなかった賄賂を用いた就任が、後期になって頻繁に見られるようになる。その金額は高額で何千 dinar にも上った。やや極端な例であるが、都合六回大カーディーに任命された Muhi al-Din Ibn al-Naqib (Sh. 50)^⑤ が、一五〇〇年の第一回目の任命に際して費やした額が七千 dn [Bz.: III, 448]、六回全部では三万六千 dn になるといふ [Bz.: V, 25]。これらの金は、任命者であるスルタンへの直接の賄賂だけでなく、スルタンに推薦してもらうための斡旋料としてアミールなどに支払われた。同じ Ibn al-Naqib は三回目の任命のときに五千 dn を出したが、そのうち約二千 dn をアミールたちに払って彼らからスルタンに推薦してもらったといふ [Bz.: IV, 91]。

有力者とのコネ、あるいは有力者からの推薦があることは、両時期を通じて大カーディー就任の重要な条件であった。

一口に有力者といっても、その顔ぶれはスルタンをはじめ、アミール、官僚である *kaṭīb al-sirr*、ウラマーとさまざまである。

スルタンとの何らかの個人的な関係によって大カーディーに就任した者は八名しか見られない。スルタンが実際に大カーディーの任命に介入できる余地は、それほど大きくなかったといわなければならぬだろう。

アミールや *kaṭīb al-sirr* が大カーディーの候補者を支援する場合、その理由は、前述のように斡旋料を得て推薦した例は別として、残念ながらほとんど不明である。史料上確認できないがスルタンとの場合のように個人的なつながりがあったのか、あるいは推薦した者に裁判などで便宜を図ってもらおうとの期待があったためではないかと思われる。

ウラマーが大カーディーの推薦者となる場合では、彼らの間に師弟関係ないしは知人関係があったようである。

こうした諸条件の中で、前期と同様最も多くの事例を数えるのは、先任の大カーディーと親族関係を有することである。そのような者はこの時期二九名認められ、さらに何人もの大カーディー就任者を出す家系もあった。但し、前期に大カーディーを輩出したシャーフィイー派のジャマーア家 (*Banu Jama'a*)、ハナフィイー派のトゥルクマーニー家 (*Banu al-Turkmani*)、マールイク派のアフナーイー家 (*Banu al-Akhna'i*) などの成員が、後期には全く認められない。先に述べた一四世紀末頃のエジプトの社会、経済上の変化が影響して、このような有力家系の交替が起こったのであろう。

以上のように、*Escovitz* が検討した時期とそれ以後を比較した場合、ナイーブから昇任する例の減少、賄賂による任命の増加、有力家系の交替といった違いはあるが、有力者とのコネと親族関係が、両時期を通じて大カーディー就任の条件として重要なものであった。前者については、史料的な制約もあり、彼らの関係をこれ以上考察することはできないが、後者については検討の余地が残されている。問題となる点は、親族間で前任者から後任者へ直接引き継いで就任した例が二九名中七名 (*Hf. 6, M. 28, 31, 33, Ho. 1, 2, 16*) と少なざることである。それならば、彼らが大カーディーに就任しやすかったのはなぜか。前期でも見られるこの問題について *Escovitz* は、大カーディーの子弟であることによって得られるネ

ームバリーが影響したのではないかと推測しているが、果たしてそうだったのだろうか。このことは、大カーディーを輩出した家系の動向、そしてそのような有力家系の存立基盤がいかなるものであったかを検討することによって明らかにできると思われる。しかし、これまでマムルーク朝時代を扱う歴史研究において、特定のウラマーの家系を対象とする研究はほとんどなされてい²⁹。Escovitz³⁰にしても、親族関係の重要性を認識しながら、単に大カーディーに就任した者同士の関係をやったに過ぎない。そこで以下、この時期に大カーディーを輩出し、その成員についてまとまった情報を得ることの可能性がある家系——ブルキーニー家 (Banū al-Bulqīnī) とミンナ家 (Banū al-Shīnā)——を取り上げて、論じてみることにする。

表1 大カーディー就任者と就任条件

（就任の日付は、任命書が出された日か記載される場合と実際に着任した日か記載される場合とがあり、史料間に相違が見られることが多い）
 ので、基本的に月までを示すことにした。

- A: 学識・能力
 - B: ナーイフからの昇任
 - C: 賄賂
 - D: 有力者とのコネ、または有力者からの推薦 (A=アミール、K=katib al-sirr、S=スルタン、U=ウラー))
 - E: 親族関係 (ブルキーニー家、ミンナ家については本稿参照のこと)
- (検討の対象にしたのは、各大カーディーの1回目の就任だけである)

(名前については、ラカフの al-Dīn を省略し、I=Ibrāhīm, A=Aḥmad, 'A='Abd al-Rahmān, 'U='Umar, M.=Muḥammad をそれぞれ表すことにする)

就任者名(名前の後の数字は、それ以前の就任のときの番号を表す)	就任期間	就任条件					その他・不明
		A	B	C	D	E	
Sh. 1. Badr M. b. M. al-Subḥī①	1382. 5. —1387. 8			○	○(A)	○	
2. Naṣīr M. b. 'Abd al-Dā'im al-Maylaq	1387. 8. —1389. 10.				○(A)		
3. Saḍr M. b. I. al-Munāwī	1389. 10. —12.		○			○②	

4. Badr M. b. M. al-Subki (1)	1389, 12.—1390, 6.					
5. ʿImād A. b. ʿĪsā al-Karakī	1390, 6.—1392, 11.			O(S)		
6. Šadr M. b. I. al-Munāwī (3)	1392, 11.—1394, 2.					
7. Badr M. b. M. al-Subki (1, 4)	1394, 2.—1395, 5.					
8. Šadr M. b. I. al-Munāwī (3, 6)	1395, 5.—1397, 2.					
9. Taqī ʿA. b. M. al-Zubayrī	1397, 2.—1399, 3.		○		○③	
10. Šadr M. b. I. al-Munāwī (3, 6, 8)	1399, 3.—1401, 4.					
11. Nāšir M. b. M. al-Šāliḥī	1401, 4.—1402, 1.		○			
12. Jalāl ʿA. b. ʿU. al-Bulqīnī	1402, 1.—1403, 5.		○	O(A)	○	
13. Nāšir M. b. M. al-Šāliḥī (11)	1403, 5.—8.					
14. Shams M. b. M. al-Akhnāʿī	1403, 8.—9.					○
15. Jalāl ʿA. b. ʿU. al-Bulqīnī (12)	1403, 9.—1404, 3.					
16. Shams M. b. M. al-Akhnāʿī (14)	1404, 3.—6.					
17. Jalāl ʿA. b. ʿU. al-Bulqīnī (12, 15)	1404, 6.—11.					
18. Shams M. b. M. al-Akhnāʿī (14, 16)	1404, 11.—1405, 5.					
19. Jalāl ʿA. b. ʿU. al-Bulqīnī (12, 15, 17)	1405, 5.—8.					
20. Shams M. b. M. al-Akhnāʿī (14, 16, 18)	1405, 8.—9.					
21. Jalāl ʿA. b. ʿU. al-Bulqīnī (12, 15, 17, 19)	1405, 9.—1412, 5.					
22. Shiḥāb A. b. Nāšir al-Bāʿūnī	1412, 5.—6.					○
23. Jalāl ʿA. b. ʿU. al-Bulqīnī (12, 15, 17, 19, 21)	1412, 6.—1418, 7.					
24. Shams M. b. ʿAḫr ʿAllāh al-Harawī	1418, 7.—1419, 4.			O(S)		

25. Jalāl 'A. b. 'U. al-Bulqīnī (12, 15, 17, 19, 21, 23)	1419. 4.—1421. 10.					
26. Walī A. b. 'Abd al-Rahīm al-'Irāqī	1421. 10.—1422. 11.	○				
27. 'Alam Šāliḥ b. 'U. al-Bulqīnī	1422. 11.—1423. 12.		○	○(A, K, U)	○	
28. Šihāb A. b. 'Alī al-'Asqalānī (Ibn Ḥajjar al-'Asqalānī)	1423. 12.—1424. 10.		○			
29. Šhams M. b. 'Aḡā' Allāh al-Harawī (24)	1424. 10.—1425. 5.					
30. Ibn Ḥajjar al-'Asqalānī (28)	1425. 5.—1429. 11.					
31. 'Alam Šāliḥ b. 'U. al-Bulqīnī (27)	1429. 11.—1431. 2.					
32. Ibn Ḥajjar al-'Asqalānī (28, 30)	1431. 2.—1437. 4.					
33. 'Alam Šāliḥ b. 'U. al-Bulqīnī (27, 31)	1437. 4.—1438. 4.					
34. Ibn Ḥajjar al-'Asqalānī (28, 30, 32)	1438. 4.—1445. 4.					○
35. Šhams M. b. 'Alī al-Qāyātī	1445. 4.—1446. 4.					
36. Ibn Ḥajjar al-'Asqalānī (28, 30, 32, 34)	1446. 5.—1447. 3.					
37. 'Alam Šāliḥ b. 'U. al-Bulqīnī (27, 31, 33)	1447. 3.—7.					
38. Walī M. b. A. al-Sa'fī	1447. 7.—1448. 6.			○(S)		
39. Ibn Ḥajjar al-'Asqalānī (28, 30, 32, 34, 36)	1448. 6.—8.					
40. 'Alam Šāliḥ b. 'U. al-Bulqīnī (27, 31, 33, 37)	1448. 8.—1449. 9.					
41. Šharaf Yalyā b. M. al-Munāwī	1449. 9.—1453. 3.			○(U)	○(Sh. 26)	
42. 'Alam Šāliḥ b. 'U. al-Bulqīnī (27, 31, 33, 37, 40)	1453. 3.—1461. 7.					
43. Šharaf Yalyā b. M. al-Munāwī (41)	1461. 7.—1463. 8.					
44. 'Alam Šāliḥ b. 'U. al-Bulqīnī (27, 31, 33, 37, 40, 42)	1463. 8.—1464. 3.					
45. Šharaf Yalyā b. M. al-Munāwī (41, 43)	1464. 3.—1466. 2.					

46. Şalâh A. b. M. al-Makîni	1466. 2.—8.					○	
47. Badr M. b. M. al-Bulqîni	1466. 8.—12.		○			○	
48. Wâhî A. b. A. al-Asyûti	1466. 12.—1481. 8/9.		○	○(U)			
49. Zayn Zakariyâ b. M. al-Anşâri al-Sinîkî	1481. 8/9.—1500. 9.	○					
50. Muhi 'Abd al-Qâdir b. 'Alî Ibn al-Naqîb	1500. 9.—1501. 1.		○				
51. Zayn Zakariyâ b. M. al-Anşâri al-Sinîkî (49)	1501. 1.—6. 25.						
52. Muhi Ibn al-Naqîb (50)	1501. 6. 25.—7. 8.						
53. Burhân I. b. M. Ibn Abî Şarîf al-Maqdisî	1501. 7. 8.—1504. 8.				○(Sh. 41)		
54. Şihâb A. b. M. Ibn al-Furfûr	1504. 8.—1505. 11.						○
55. Jamâl I. b. 'Alî al-Qalqashandî	1505. 11.—1506. 5.		○				
56. Muhi Ibn al-Naqîb (50, 52)	1506. 5.—1507. 1.						
57. Jamâl I. b. 'Alî al-Qalqashandî (55)	1507. 1.—1508. 6.						
58. Kamâl M. b. 'Alî al-Ṭawrî	1508. 6.—1510. 3.		○				
59. Badr M. b. A. al-Makîni	1510. 3.—6.		○			○	
60. Muhi Ibn al-Naqîb (50, 52, 56)	1510. 6.—8.						
61. Kamâl M. b. 'Alî al-Ṭawrî (58)	1510. 8.—1512. 9.						
62. Muhi Ibn al-Naqîb (50, 52, 56, 60)	1512. 9.—1513. 1.						
63. Kamâl M. b. 'Alî al-Ṭawrî (58, 61)	1513. 1.—1514. 1.						
64. 'Alâ' 'Alî b. Abî al-Qasam al-Ikhmîni	1514. 1.—1515. 7.						○
65. Muhi Ibn al-Naqîb (50, 52, 56, 60, 62)	1515. 7.—8.						
66. Kamâl M. b. 'Alî al-Ṭawrî (58, 61, 63)	1515. 8.—1516. 11.						

67. Sharaf Yahyā Ibn al-Burdnī	1516. 11.—1517. 3.					○
Hf. 1. Shams M. b. A. al-Ṭarābūsi	1384. 9.—1390. 8.	○	○(K)			
2. Maḥd Jamāʿī b. I. al-Khānī	1390. 8.—1391. 7.		○(U)			
3. Jamāl Maḥmūd b. M. al-Qayṣarī	1391. 7.—1396. 12.					○
4. Shams M. b. A. al-Ṭarābūsi (1)	1396. 12.—1397. 9.					
5. Jamāl Yūsuf b. Mūsā al-Malaḥī	1398. 1.—1400. 12.					○
6. Amin ʿAbd al-Wahhāb b. M. al-Ṭarābūsi	1401. 1.—1403. 2.			○(X Hf. 1)		
7. Kamāl ʿU. b. I. Ibn al-ʿAdīm	1403. 2.—1408. 11.	○				
8. Naṣīr M. b. ʿU. Ibn al-ʿAdīm	1408. 11.—12.	○		○(X Hf. 7)		
9. Amin ʿAbd al-Wahhāb b. M. al-Ṭarābūsi (6)	1408. 12.—1409. 5.					
10. Naṣīr M. b. ʿU. Ibn al-ʿAdīm (8)	1409. 5.—1412. 5.					
11. Muḥibb Abū al-Walīd M. Ibn al-Shīna	1412. 5.—6 ?					○
12. Naṣīr M. b. ʿU. Ibn al-ʿAdīm (8, 10)	1412. 6 ?—9.					
13. Šadr ʿAlī b. M. Ibn al-ʿAdāmī	1412. 9.—1413. 12.		○(S)			
14. Naṣīr M. b. ʿU. Ibn al-ʿAdīm (8, 10, 12)	1413. 12.—1416. 6.					
15. Shams M. b. ʿAbd Allāh Ibn al-Dayrī	1416. 7.—1419. 11.					○
16. Zayn ʿA. b. ʿAlī al-Ṭafahī	1419. 11.—1426. 3.					○
17. Badr Maḥmūd b. A. al-ʿAynī	1426. 3.—1429. 11.	○	○(S)			
18. Zayn ʿA. b. ʿAlī al-Ṭafahī (16)	1429. 11.—1432. 3.					
19. Badr Maḥmūd b. A. al-ʿAynī (17)	1432. 3.—1438. 7.					
20. Saʿd Saʿd b. M. Ibn al-Dayrī	1438. 7.—1462. 7.				○(X Hf. 15)	

21. Muhibb Abū al-Faḍl M. Ibn al-Shūna	1462. 7.—1463. 4.						○	
22. Baḍr al-Ḥasan b. 'Alī Ibn al-Sawwāf	1463. 4.—9.			○	○(A)			
23. Muhibb Abū al-Faḍl M. Ibn al-Shūna (21)	1463. 9.—1466. 2.							
24. Burhān I. b. M. Ibn al-Dayrī	1466. 2.—8.						○(X H. 15 H. 20)	
25. Muhibb Abū al-Faḍl M. Ibn al-Shūna (21, 23)	1466. 8.—1472. 9.							
26. Shams M. b. A. al-Amshāḥī	1472. 9.—1480. 11.				○(U)			
27. Sharaf Musā b. A. Ibn 'Īd	1481. 1.—3.							○
28. Shams M. b. 'U. Ibn al-Maghribī	1481. 4.—1486. 10.				○(A)			
29. Nāṣir M. b. A. Ibn al-Ikhnīmī	1486. 10.—1497. 8.				○(S)			
30. Burhān I. b. 'A. Ibn al-Karakī	1497. 9.—1501. 1.				○(S)			
31. Sarī 'Abd al-Barr b. M. Ibn al-Shūna	1501. 1.—2.						○	
32. Burhān I. b. 'A. Ibn al-Karakī (30)	1501. 2.—5.							
33. Sarī 'Abd al-Barr b. M. Ibn al-Shūna (31)	1501. 5.—1514. 1.							
34. Shams M. al-Sandīsi	1514. 1.—1515. 10.							○
35. Ḥusām Maḥmūd b. 'Abd al-Barr Ibn al-Shūna	1515. 10.—1517. 3.			○			○	
M. I. Walī 'A. b. M. al-Ḥāḍramī (Ibn Khaldūn)	1384. 8.—1385. 6.	○			○(S)			
2. Jamāl 'A. b. M. Ibn Khayr al-Iṣṣandarānī①	1385. 6.—1389. 9.		○					
3. Taj Bahrām b. 'Abd Allāh al-Damrī	1389. 9.—1390. 3.		○					
4. Shams M. b. Yūsuf al-Rakrākī	1390. 3.—1391. 9.							○
5. Shihāb A. b. 'Abd Allāh al-Nahrīrī	1391. 12.—1392. 10.			○				
6. Nāṣir A. b. M. Ibn al-Tanāsī	1392. 10.—1399. 5.							○

7. Ibn Khaldūn (1)	1399. 5.—1400. 9.					
8. Nur 'Alī b. Yūsuf Ibn al-Jalāl	1400. 9.—1401. 1.	○				
9. Jamāl 'Abd Allāh b. Miqdād al-Aqfahasi	1401. 1.—5.					○
10. Ibn Khaldūn (1, 7)	1401. 5.—1402. 2.					
11. Jamāl Yūsuf b. Khālid al-Bisāfi	1402. 2.—7.	○			○⑤	
12. Ibn Khaldūn (1, 7, 10)	1402. 7.—1403. 9.					
13. Jamāl Yūsuf b. Khālid al-Bisāfi (11)	1403. 9.—1405. 1.					
14. Ibn Khaldūn (1, 7, 10, 12)	1405. 2.—5.					
15. Jamāl 'Abd Allāh b. Miqdād al-Aqfahasi (9)	1405. 5.—8.					
16. Jamāl 'Abd Allāh b. A. Ibn al-Tanasi	1405. 8, 27.—29.			○(A)	○(父 M. 6)	
17. Jamāl Yūsuf b. Khālid al-Bisāfi (11, 13)	1405. 8, 29.—1406. 3, 7.					
18. Ibn Khaldūn (1, 7, 10, 12, 14)	1406. 3, 7—16.					
19. Jamāl 'Abd Allāh b. A. Ibn al-Tanasi (16)	1406. 3, 16—4.					
20. Jamāl Yūsuf b. Khālid al-Bisāfi (11, 13, 17)	1406. 4.—1410. 2.					
21. Shams M. b. 'Alī al-Madani	1410. 2.—1413. 7.			○(K)		
22. Shihāb A. b. 'Abd Allāh al-Umawi	1413. 7.—1414. 11.			○		
23. Jamāl 'Abd Allāh b. Miqdād al-Aqfahasi (9, 15)	1414. 11.—1420. 5.					
24. Shams M. b. A. al-Bisāfi	1420. 6.—1439. 2.				○(従兄弟進 M. 11)	
25. Badr M. b. A. Ibn al-Tanasi	1439. 3.—1449. 4.				○(父 M. 6 兄? M. 16)	
26. Walī M. b. M. al-Sinbati	1449. 4.—1457. 6.					○
27. Husām M. b. Abū Bakr Ibn Jirayz	1457. 6.—1469. 2/3.					○

28. Sirāʾi ʿU. b. Abū Bakr Ibn Hūrayz	1469. 2/3. —1472. 7.				○(FL M. 27)	
29. Burihān I. b. M. al-Laḡānī	1472. 7. —1481. 9.	○				
30. Muḥi ʿAbd al-Qādir b. A. Ibn Taqī	1481. 9. —1490. 10.		○			
31. Taqī ʿAbd al-Ghānī b. A. Ibn Taqī	1491. 1. —1501. 11.				○(FL M. 30)	
32. Burihān I. b. ʿU. al-Damirī	1501. 11. —1508. 1.					○
33. Muḥi (Sharaf) Yahyā b. I. al-Damirī	1508. 2. —1513. 12.				○(ʿM. 32)	
34. Jalāl M. Ibn Qasim	1514. 1. —1515. 10.					○
35. Muḥi (Sharaf) Yahyā b. I. al-Damirī (33)	1515. 10. —1516. 11.					
36. Shams M. b. I. al-Tarāʾī (al-Thanaʾī, al-Shanaʾī)	1516. 11. —1517. 3.					○
Hb. 1. Burihān I. b. Naṣr Allāh al-ʿAsqalānī	1393. 7. —1399. 11.	○			○⑥	
2. Muwaffaq A. b. Naṣr Allāh al-ʿAsqalānī	1399. 11. —1400. 2.				○⑦	
3. Nūr ʿAlī b. Khalīl al-Ḥikrī	1400. 2. —8.		○			
4. Muwaffaq A. b. Naṣr Allāh al-ʿAsqalānī (2)	1400. 8. —1401. 4/5.					
5. Majīd Salīm b. Salīm al-Maqdisī	1401. 4/5. —1415. 4.				○⑧	
6. ʿAlā ʿAlī b. Maḥmūd Ibn al-Muḡhbulī	1415. 4. —1424. 12.			○(K)		
7. Muḥibb A. b. Naṣr Allāh al-Baḡhdādī	1425. 1. —1426. 4.	○				
8. ʿIzz ʿAbd al-ʿAzīz b. ʿAlī al-Baḡhdādī	1426. 4. —1427. 12.					○
9. Muḥibb A. b. Naṣr Allāh al-Baḡhdādī (7)	1427. 12. —1440. 10.					
10. Badr M. b. M. al-Baḡhdādī	1440. 10. —1453. 5.	○				
11. ʿIzz A. b. I. al-ʿAsqalānī	1453. 5. —1471. 10.				○(ʿHb. 1)	
12. Badr M. b. M. al-Saʿdī	1472. 2. —1497. 7.	○		○(K)		

13. Shihāb A. b. 'Alī al-Shishīnī	1497. 12. —1499. 4.						○
14. Bahār M. b. M. Ibn Qudama	1499. 4. —5.						○
15. Shihāb A. b. 'Alī al-Shishīnī (13)	1499. 5. —1513. 4.						
16. 'Izz M. b. A. al-Shishīnī	1513. 5. —1514. 1.		○			○(文 Hb. 13)	
17. Shihāb A. b. 'Abd al-'Azīz al-Futūhī (Ibn al-Najār)	1514. 1. —1516. 11.						○
18. 'Izz M. b. A. al-Shishīnī (16)	1516. 11. —1517. 3.						
合計		5	12	18	25	29	25

- ① 彼の1回目の任命は1377年のことであり、表ではその時の事情を被討対象としているが、それについては Escovitz 1984: 74 参照。なお、彼の親族で大カーディーに就任しているのは、父 Bahār al-Dīn Muḥammad b. 'Abd al-Barr al-Subkī (在任1365—71年) である。
- ② 彼の母方の祖父がハチフナー派大カーディー Zayn al-Dīn 'Umar b. 'Abd al-Rahmān (在任1342—84年) である。
- ③ 彼の弟がハンスバル派大カーディー Muwaffiq al-Dīn 'Abd Allāh b. Muḥammad al-Maqdisī (在任1338—67年) である。
- ④ 彼の1回目の任命は、1381年のことであり、表ではその時の事情を検討対象としているが、それについては Escovitz 1984: 52 参照。
- ⑤ 彼の兄がマリーク派大カーディー 'Alam al-Dīn Sulaymān b. Khalīd al-Bisā'ī (在任1377, 1377—81年) である。
- ⑥ 彼の父が、ハンスバル派大カーディー Nāsir al-Dīn Nāsir Allāh b. Aḥmad al-'Asqalānī (在任1367—93年) である。
- ⑦ 彼の母方の祖父、父が、それぞれハンスバル派大カーディー Muwaffiq al-Dīn 'Abd Allāh b. Muḥammad al-Maqdisī (在任1338—67年), Nāsir al-Dīn Nāsir Allāh b. Aḥmad al-'Asqalānī (在任1367—93年) であり、兄が Hb. 1 である。
- ⑧ 彼の祖父がハンスバル派大カーディー Muwaffiq al-Dīn 'Abd Allāh b. Muḥammad al-Maqdisī (在任1338—67年) のはここにあたる。
- ⑨ ナーイントは、卒業通り大カーディーの代理として、カイロをその他エジプトの町村で業務を担当する者である。カイロに居るのはその任命権を各法学派の大カーディーが握っていたが、カイロ以外のエジプトではナーイント派大カーディーによって任命された [SA: III, 34-6; Escovitz 1984: 24]。
- ⑩ 参考のために記すと、前期の大カーディーの場合、学識・能力が認められて任命された者三名、前任者のナーイントから昇任した者一〇名、有力者とのコネによる者九名、先任の大カーディーと親族関係をも

有る者一〇名、その他不明二名を合わせた [Escovitz 1984: 41-93]。

⑪ このことは、人名辞典に記載されている師弟関係から確かめることができる。ある人物がいた師の中に大カーディー就任者の名前を見つかることは容易である。なか、この時期の大カーディー就任者のうち、半数以上が先任の大カーディーに何らかの教育を受けている。

⑫ 但し、大カーディーに就任するまでにナーイントを経験した者は数多く認められる。人名辞典では「某のナーイントなる(naba'an-kadha)」

と記載されるのが普通であり、いつ、どのくらいの間ナイーンを務めたのか、正確にはわからないが、記述の順序から考えると、勉学を終えた者が就く最初の職だったようである。このことはナイーンになる年齢からも裏付けられる。Bulletinによれば、西暦一〇世紀から一二世紀にかけてのニーシャーブルにおおむね、ある個人が教育を受け終わるのが二三歳から二十七歳位であるところ（Bulletin, R. W., "The Age Structure of Medieval Islamic Education," *SI*, 62 (1983), 111）。一方、ナイーンになるのは大体おおよそ二〇代の半ばから三〇代であったと計算され、Bulletinの示した年齢の範囲とはほぼ一致するのである。したがってナイーン職は、地位そのものではなく、一通りの勉学を終えた若者が実務経験を積む過程として、大カーディー就任者の経歴に重要な位置を占めたと考えられる。

④ 一四四〇—一五一六年 [BZ: V, 25-6; DL: IV, 280-1; GKS: I, 253]。彼が賄賂によって大カーディーに就任したことは『三浦徹「ムムルタ朝末期の都市社会——ダマスカスを中心として」』『史学雑誌』九八一—（一九八九）、注⑩でも触れられている。なお、名前の後に付した記号は表1に準拠し、複数回就任している者の場合は第一回目の就任のときの番号を示すことにする。以下同様。

⑤ 一六世紀初めにカイロで一カ月に徴収される市場税 (mushahar) が約二千 din とおぼろげであるから [Lapidus: 99-100]、うかがい高額であったかがわかる。

⑥ dīwan al-īnshā' の長べ、スルタン宛の書簡を読む上げ、返書起草し、スルタンの署名を得て発送するジャマ'トザリーム (magālim) 裁判が行われる dar al-'adl に出席するジュ'ムリーム (Barid) の管理を行つたなどその職務をつとめた [Martel-Thoumian, B., *Les couts et l'administration dans l'état militaire musulman IX^e/XV^e siècle*], Damas, 1991 (三上、Martel-Thoumian 著書) 41-4; Popper, W.,

Egypt and Syria under the Circassian Sultans 1382-1468 A.D.: Systematic Notes to Ibn Taghri Birdi's Chronicles of Egypt, 2 vols., Berkeley, 1955-7, I (三上、Popper 著書) 100]。

⑦ 例を以て 'Imād al-Dīn al-Karakī (Sh. 5) (一三三〇—一三三九八年) [DL: II, 60-1; IG: IV, 41-3; MS: II, 54-5; RI: 92-6] の場合カラク (Karak) に幽閉されつづけた前スルタン Barquq (在位一三八二—一三九〇—九年) の脱出を助けたことが機縁となり、Barquq の復位後カイロと呼び寄せられて大カーディーに任じられた。また歴史家として有名な Badr al-Dīn al-Aynī (HR: 17) (一三六一—一四五一年) [DL: X, 131-5; DR: 428-40; NZ: XVI, 8-11; Wier: No. 2464] は、そのトルコ語の能力を買われてスルタン Barsbay (在位一四三二—一三八八年) の側近となり、Barsbay が 'al-Aynī がどうかしたら、余のイスマームは間違ひたものとなつてつたなると任命されてゐる。なお Ibn Khaldūn (M. I) につづいては、年代記や人名辞典に彼がスルタンとの関係によって任命されたとは記されていないが、彼の自叙伝によると Barquq と知己になったことが経歴上大きな意味を持ったと思われるので『森本公誠「イブン・ムルドゥーン」(講談社、一九八〇年)』一三二—一三七』表1ではDの項目に印を加えた。

⑧ スルタンやアミールが大カーディーから自らに都合のいい判決判断を引き出していたことは既に指摘されているところである [Esso-vitz 1984: 131-62; Lapidus: *passim*; 森本公誠「イブン・ムルドゥーン」の見たエジプトの司法界』『中近東文化史論叢』(一九九二)。大カーディーに自分の推薦した者が就いていられ、それはより容易なためである。また、スルタンがあるアミールを処刑しようとした際、そのアミールと関係がある(詳細は不明)ブレキサンドリアのカーディー

一が彼を助命する裁定を下したところ、事例 [G: IX, 87-8; KS: IV, 1139] もあり、大カーディーが縁故ある者に配慮した判決を下して、それが推測される。

㉑ 例えは、Shams al-Din al-Anshūhī (Hf. 26) (一四〇九—一四八〇年) [BZ: III, 170; DL: VI, 301-4; DR: 205-19] 及び、師である Amin al-Din Yahyā b. Muḥammad al-Aḡḡarī (一三九四—五一—一四一五年) 當時のムンタナー派カーディーの第一人者 [BZ: III, 107; DL: X, 240-3] から推測されて任命された。

㉒ 例えは、ムンタナー派大カーディー 'Alī' al-Dīn Ibn al-Mughnī (Hf. 6) が後述の 'Alan al-Dīn Saḥīh al-Buḡīnī (Sh. 27) を大カーディーに推薦したのは、両者が知人であったためであると想われる。

㉓ Mandaville, J. S., "The Muslim Judiciary of Damascus in the Late Mamluk Period," Ph. D. diss. Princeton University, 1969 には、ダマスカスでも同じ頃を境にカーディーの有力家系の交替が見られるとして、その原因をこの頃の政治的混乱と経済の衰退に求めつつ

二 有力家系の動向(一)——成員の経歴と活動

1 ブルキーニー家^㉑

カイロの北、約一〇〇里のところにあるブルキーナ (Buḡīna) はこの家系が住みつくようになったのは、Saḥīh なる者からであるところ、[DL: V, 85]。彼の曾孫でもある 'Umar の世代に至るまでは、この家系の中で経歴の明らかたじきる者はなからぬ。

1. Sirāj al-Dīn 'Umar (3)^㉒

㉑ [14—20]。

㉒ このような研究としては管見の限り次のものが挙げられるくらいである。前述のシャーンヌナー派カーディーの名家でもあるシャーンヌナー家と関与する Saḥībī, K. S., "The Banū Jamā'a: A Dynasty of Shafi'ite Jurists in the Mamluk Period," *SI*, 9 (1958) (以下 Saḥībī 1958 参照)。同じく al-Suhbī 家を扱った Husayn, Muḥammad al-Sādiq, *al-Bayt al-Suhbī, al-Qalīra, 1948* (以下 Husayn 参照)。また、ムンタナー派の著者 Ibn Saḡrā の系譜上の位置について試みた Brinner, W. M., "The Banū Saḡrā: A Study in the Transmission of a Scholarly Tradition," *Arabica*, 7-2 (1960)。本稿で取り上げたムンタナーニー家、ムンタナー家に触れている研究もあるが、それらについてはそれぞれ次章注^㉑、^㉒を参照のこと。また、一四世紀末以後の官僚についての包括的研究である Martel-Thoumian の前掲書^㉑の中には、官僚を輩出した一〇の家系について論じられている [Martel-Thoumian: 183-325]。

一三二四年八月四日ブルキーナで生まれた彼は、そこへ行くつかの書物について学んだ後、一二歳の時父親のすすめでカイロへ出て、Taqi al-Din al-Subki^③と Tazz al-Din Ibn Janāna^④など、当時の有名なウラマーに師事した。

その師の一人 Bahār al-Din Ibn 'Aqil^⑤の娘と結婚したことが、彼のその後の人生を切り開いた。一三五八年 Ibn 'Aqilがシャーフィイー派大カーディーになるとそのナイーブに任命され、やがに彼の後任として Jamī' Yamr b. al-'As [KM: II, 246-56] の中では Zawīya al-Khashshabiyya での法学の講義を任されたのである。以後彼は、一三六四年にエジプトの dar al-'adī の muftī^⑥ 一三六八年ダマスカスのシャーフィイー派大カーディー、一三七二年エジプトの qaḍī al-'askar^⑦ にそれぞれ就任している。またこの間に Jamī' Ibn Tulūn [KM: II, 265-9], al-Madrasa al-Barquḍiyya [KM: II, 418], al-Madrasa al-Malikīyya [KM: II, 392], al-Madrasa al-Kharṛūbiyya [KM: II, 369-70] など、いくつかの madrasa を、モスクで教鞭をとった。

一三七七年エジプトの大カーディーに推薦されたが、対抗馬が現れて就任することはできなかった。al-Sakhāwī は何度もエジプトのカーディー職に指名された (uyyīna) が、就任には至らなかった。ただそれ (カーディー職) よりも高位にのぼり、大カーディーたち (Kubār al-quḍāt) よりも上座に座るようになった [DL: VI, 86]

と述べるが、この一件以外にいつ大カーディー就任の話が持ち上がったのかは確認できない。ともあれ、以後彼が何らかの官職に就いたという記録は見当たらない。しかし、むしろそうして官職から遠のいたことが彼の名を高めることになったのだろうか。al-Sakhāwīの言う通り、その後年代記の中に見出されるのは shaykh al-Islām^⑧ と呼ばれ、大カーディーたちと共にスルタンの主権するマジュリスに加わり、意見を求められる彼の姿である。この頃エジプトにいた Ibn Khaldūn は彼のことを評して「今日のエジプトで最大のシャーフィイー派法学者で、事実、またエジプトで最大の宗教指導者でもある」と述べている。一四〇三年六月二日に死去。遺体は彼がカイロの Bahār al-Din と同じ名のハンラ [KM: II, 2] に建設したマドラサに埋葬された。以後ここがブルキーニー家代々の墓所となる。^⑨

さて、彼には少なくとも一人の姉と二人の兄がいたことが確かめられる。長兄 *Nasir al-Din Muhammad* (1) は、一三二五—六年に生まれ、ブルキーナで農業に従事し、一四〇一—二年に死んだという [DL: VII, 244]。彼に関する記事の中で *al-Sakhawi* は、その上の一四〇〇—一年に九〇歳をこえて亡くなった姉がいたと記す。次兄 *Abū Bakr* (2) は、*Ibn Hajar al-ʿAsqalanī* によれば、「父の道に従って大地の民 (*ahl al-barr*) の生活を営んだ」 [G: I, 24] といふことである。これらの記述から、*Siraj al-Din ʿUmar* が出るまでのブルキーニー家は、規模はわからないが、下エジプト地方で農業を営む家であったと考えられる。しかし彼より後の世代は、以下に述べるようにほとんど皆ウラマーとして活動しており、農業との関わりは一切不明である。すっかり農業をやめてしまったのか、史料に記載はないが副業として携わっていたのか、あるいは史料の言及していない者がいて引き続き農業を行っていたのか。いずれにせよ、ブルキーニー家は以後、ウラマーの家系として有名となり、大カーディーを輩出することになる。

2. *Jalāl al-Din ʿAbd al-Rahmān* (5) (Sh. 12)

彼がブルキーニー家の中で大カーディーになった最初の者である。一三六一—二年カイロで誕生。父や母方の祖父である *Ibn ʿAqīl* のほか、*Zayn al-Din ʿIṣṣāq* や *Tāj al-Din al-Subkī* ④ などから教えを受けた。一三七七年、兄 *Badr al-Din Abū al-Yaman Muḥammad* (4) が父より *qaḍī al-ʿaskar* の職を譲られた際に、*tawqīʿ al-dast* ⑤ 職を兄から引き継いだ。一三八七年同様にして兄から *dar al-ʿadl* の *muftī* の職を譲り受け、一三八九年にその兄が死ぬと、あとを継ぎ *qaḍī al-ʿaskar* に就任した。

そして一四〇二年エジプトの大カーディーに任命されるのであるが、それに至る経緯を *Ibn Hajar* は次のように記す。

彼の父はことある毎にマジュリスで彼のことを賞賛し、彼のすんでを褒め、学生たちに彼の下で学ぶよう勧めた。それは「大カーディーの」地位から *al-Munawwī* (Sh. 3) が離れるまで続いた。〔しかし〕 *al-Salḥī* (Sh. 11) がそれ (大カーディー職) に飛びついた。彼 (*ʿAbd al-Rahmān*) はその失敗を悔やんだ。そして *al-Salḥī* が数カ月後に辞めるまで奔走して (*saʿa*) 任命された。そ

これは入〇四年 Jumada I 月^⑨のムウブ^⑩當時 amir akhur べヌンタンの厚命に任じられた Sudun Faz^⑪ の配慮に及ぶものだった。 dawādar al-kabir 〇 Jakam は、そのムウブを知りて怒りて [al-Madrasa] al-Salihiyya [KM: II, 374-5] へ憤懣をなすべく同行するムウブを拒否した。その上彼 (Abd al-Rahmān) は Jakam を金見を求め、彼の父と我が師 Sirāj al-Din と共に Jakam の家へ行った。Jakam はカーディー職に就くための賄賂は認められなうと迫ったが、 al-shaykh (Sirāj al-Din Umar) はそれを差し支えなうことを説明し、彼は「無事」任命された [RI: 332; DL: IV, 108]

すなわち、父親の熱心なバックアップと賄賂による有力マシールからの後援のとりつけがあつて、漸く彼は大カーディーになることができたのである。以後これを合めて計七回、一六年余りにわたつて大カーディーを務めた。⑬教育に関する職では、時期を特定するムウブはひきながら、Zāwiya al-Khashshābiyya, al-Madrasa al-Malikiyya, al-Madrasa al-Kharrūbiyya の法掌、Jāmi' Ibn Tūlūn, al-Madrasa al-Barquqiyya 〇タフミンルの講義を父から引き継ぐべそれぞれ担当したほか、al-Jāmi' al-Mu'ayyadiyya [KM: II, 328-30] や Madrasa al-Jamāliyya [KM: II, 401-3] などと教えたことも、一四二一年一〇月九日大カーディー在職中に死去。

⑩ 'Alam al-Din Sālih (6) (Sh. 27)

一三八八年または一三八九年五月一〇日カイロで誕生。彼の母親は Abū al-Yaman (4) と Abd al-Rahmān (5) 〇二人の兄の母である Ibn 'Aqūl の娘ぶはなは、父親の従姉妹連にまたる Zaynab (14) であつた。そのほか、彼女が Sālih と 'Abd al-Khalīq (7) の二人を生んだ後、'Umar (3) と乳兄弟の間柄であつたことが判明して離婚するものとなり、彼女は二人の息子を連れて従兄弟の 'Izz al-Din 'Aziz (13) の下に身を寄せたところ、とほごえ、'Umar は Sālih の面倒をみて、その教育に当たり、異母兄となる 'Abd al-Rahmān を彼を教えた。その他には Ibn Hajar (Sh. 28) や Wall al-Din 'Itrāqī (Sh. 26) などに師事した。⑭

その後二人の兄と同様に tawqī' al-dast 職に就き、ひつと兄 'Abd al-Rahmān 〇 Damanhūr (トキント) にあそ

るナーイブに任命された。また彼から al-Madrasa al-Barqudiyya のタフシールの講師の職を譲り受けた。そして次のような話を Ibn Hajar が伝えている。それは、城塞が開かれたブハーリーのサヒーフを詠む集まりの席上、シャーフィイー派大カーディー Shams al-Din al-Harawi (Sh. 24)²²⁾ のイスナードに関して疑問が生じたため、この頃彼から大カーディーの地位を取り返さうとこつこつた兄 'Abd al-Rahman が呼び出された時のことである。

'Abd al-Rahman は法学をハディースの益についで示し、ハッムル派大カーディーの 'Ala' al-Din Ibn al-Mughni (Hb. 6)²³⁾ 彼に同意したが、 al-Harawi からは二人の言葉に合わせる一言もなかった。……〔中略〕……Jalal al-Din ['Abd al-Rahman] は弟 'Alam al-Din に問題となるところを示し、その根拠と答えを覚えこませ、それを al-Harawi に質問し、うるちがらせるように用意してゐた。それははずすべし al-Harawi の欠点を暴くためであつた [RI: 336; DL: IV, 108]

ここで兄が Salih ibn al-Harawi に対する問題を教えこんだのは、スルタンやウラマーの前で Salih を披露することを狙っていたからではないかと推測される。そして彼の名が広く知られるようになる一件にも、意図したことをではないとはいへ、この兄が関わつてゐた。一四二二年 'Abd al-Rahman は、スルタンになつたばかりの 'Iqtar (在位一四二二年) からイード(id)のフトバを頼まれたが、体調が思ひしくなかつた。そこではじめ自分の息子に代行させようとしたが、できなと断つたので、Salih に任せることになつた。その時の彼の声の大きさがスルタンらを驚かせ、「彼が学問のある者 (salim) であることが彼の心々に刻みつけられた」 [RI: 257; DL: III, 313] とつう。さらに、この後まもなく亡くなつた兄にかわり Zawiyah al-Khashshabiyyah で法学の講義を担当した。

このようにして、彼は兄のリードで大カーディー就任に至る経歴を歩んだのである。兄の死後、師の Wali al-Din 'Iraqi が就任してゐたにもかかわらず、大カーディーになるために奔走し、amir al-khūr の Qasrūh, katib al-sirr の 'Alam al-Din Ibn al-Kuwayz, ハンバル派大カーディーの 'Ala' al-Din Ibn al-Mughni の三人から推薦をうけ、一四二二年大カーディーに就任した²⁴⁾。なお、以前に al-Harawi に対して 'Abd al-Rahman の側についた Ibn al-Mughni が Salih

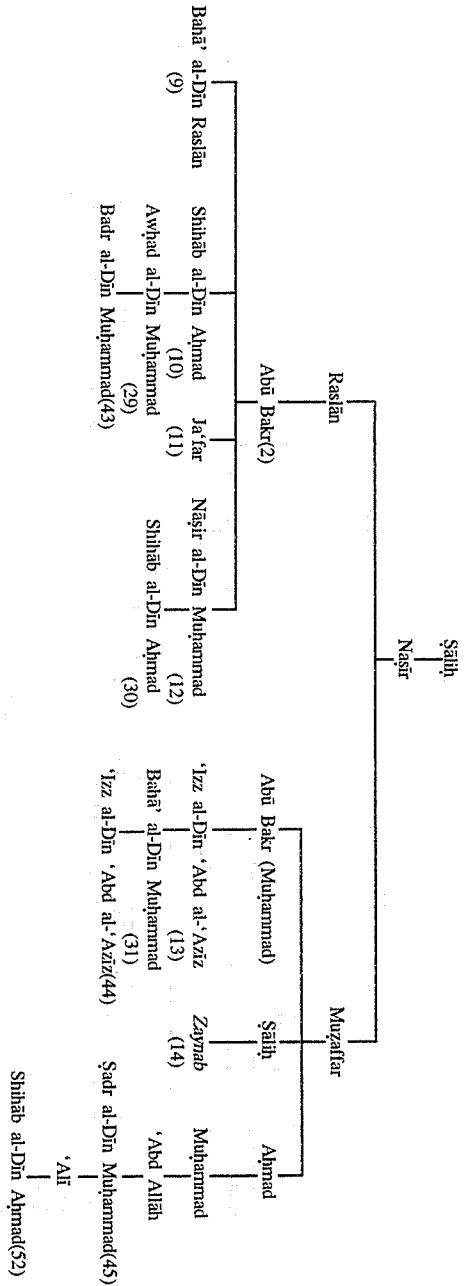
の推薦者となっていることは、両者が知人関係にあったことを窺わせ、さきの推測を裏付けるものであるといえよう。以後、一四六四年三月一四日に没するまで通算で七回、約二三年間大カーディーになった。彼はこの職にこだわりを持っていたらしく、再任される前の一四二九年、ダマスカスの大カーディーに就任するようスルタンに求められたが、断ったという [KS: IV, 798]。また、彼はその在職中に蓄財と影響力の拡大に努めたようである。Ibn Hajar は、彼がメッカとメディナのためにされた寄金を横領していたと記す。その他、ある有力なウラマーの息子が死んだ際にその後見人が不在であるのに乗じて、彼が就いていたいくつかのマドラサのポストを他のウラマーに勝手に振り分けたという話も伝えられている。

4. Salāh al-Dīn Aḥmad al-Makīnī (23) (Sh. 46)

彼はブルキーニー家と血縁関係のある人間ではないが、母親の再婚相手である Salīh (6) の指導の下で育ったという点で、ブルキーニー家の一員と見なしてもよいであろう。

一四一八年カイロで生まれる。実父については不明だが、父方の祖父は amir al-hajj を務めたマムルークであったという。父と離婚した母に連れられて Salīh のところに身を寄せた彼は、主にその義父について学んだ。最初に得た職は義父のナーイブで、その後は彼やその他のブルキーニー家の者たちの配慮でいくつもの職を紹介してもらった。例えば、義理の従兄弟である Zayn al-Dīn al-Qāsim (20) から al-Madrasa al-Nāsiṭiyya [KM: II, 400-1] の法学の教授職、Wali al-Dīn Aḥmad から Jamī' al-Maghribī [KM: II, 328] のハンマーン職と管理職 (niẓāra) を譲られている。また、義父 Salīh によっていくつものワクフの管理を任されたことが彼を裕福にしたという。それに関して年代記には、彼がワクフの交換を行って利益を得ていたために、投獄されたという記事が見える [BZ: II, 365]。その他、彼は al-Madrasa al-Kharṭūbiyya や al-Madrasa al-Sharīfiyya [KM: II, 373-4] などでも教鞭をとった。

一四五七年、義父の支援と三千 dn の金によってムフタシブとなったが、六カ月後物価高騰の責任を負わされて解任さ



フルカーニー家系図 (2)

れた。義父の死後、大カーディーとなるべく活動を始め、一四六六年に就任。しかし前任者 Sharaf al-Din al-Munawi (Sh. 41) による誹謗中傷にあつて七カ月後には解任された。以後、復帰を望みながら果たせなかつた。一四七六年六月二八日死去。遺体は他の者と同様、フルカーニー家のマドラサに埋葬された。

5 Badr al-Din Abu al-Sa'adat Muhammad (39) (Sh. 47)

一四一七／八年生まれ。大叔父にあたる Salih (6) に特に師事し、後にはその娘 'Amā'im (25), Alif (27) の二人と結婚した。父 Tāj al-Din Muhammad (19) から Jamī' Ibn Tūlūn や Tanfīl を教えるホストなどを譲つてもらつた。叔父の Zayn al-Din Qasim (20) と共同で担当した。一四三七／八年、大叔父のナイブとして下エジプトの Ibyār や

Bilbays などに赴任。そして父の死後（一四五一年）、任期は不明だが、qādi al-'askar 職を得た。一四五四年、al-Madrasa al-Mansūfiyya [KM: II, 379-81] の法学の教授職を二〇〇 dn で、そして一四六〇年には Khānqāh Sa'id al-Su'adā' [KM: II, 414-5] の管理職を約五〇〇 dn という金額でそれぞれ手に入れたという。一四六四年大叔父が死去すると、その女婿であるとき盾に一五〇〇 dn を受け取り、その子 Khānqāh al-Baybarsiyya [KM: II, 416-8] を Zāwiya al-Khas-shābiyya などで大叔父が持っていた職を継承した。

一四六六年 Salāh al-Dīn Ahmad al-Makīni (23) 解任後、借金をしてつくったという七千 dn の金を用いて大カーディーに任命されたが、わずか四カ月で経験不足と行状の悪さを理由に任を解かれた [BZ: II, 445]。その後は大カーディーになるためにした借金返済に追われ、一四八五年三月一九日に病没した。

9. Badr al-Dīn Muhammad al-Makīni (42) (Sh. 59)

先の Salāh al-Dīn Ahmad al-Makīni (23) の息子である彼もブルキーニー家とのつながりを利用して大カーディーにまでなったといえる。一四三八年二月二十四日カイロで誕生。義理の祖父である Salih (6) や父の下で学び、一四六三年その祖父にナーイブに任命され、父親が大カーディーのときにも Damanhūr やカイロでナーイブを務めた。父の死後、al-Madrasa al-Sāhibiyya と al-Madrasa al-Jawūliyya [KM: II, 386] それぞれの法学の教授職、および後者の管理職を引き継ぎ、また義理の叔父 Fath al-Dīn Muhammad (26) が一四八七年に死ぬと、彼の保持していた Zāwiya al-Khash-shābiyya と al-Madrasa al-Sharifiyya の法学の教授職、および qādi al-'askar 職を四千 dn で手に入れた。その金は義理のおなじ Alif (27) より借り受けたものであるところ、[DL: XII, 81]。一五〇〇年、今度は三千 dn の金によって大カーディーに就任するが、三カ月に満たない期間で解任され、それから約二カ月後の八月一七日に没した [BZ: IV, 171, 183, 188]。

彼の没後、この家系でその活動を確認できる成員はいない。但し、BZ の中にブルキーニーというニスバを持つ者を二

Bahā' al-Dīn Abū al-Baqā' Muḥammad (24) (1416/7-1452)	DL : XI, 8
'Amā'im (25) (1422/3-1468)	DL : XII, 84
Faṭḥ al-Dīn Muḥammad (26) (1441-1487)	DL : VII, 268-9
<i>Alif</i> (27)	DL : XII, 7-8
Walī al-Dīn Muḥammad (28) (1361/2, 1372-1451)	DL : VIII, 110-1
Awḥad al-Dīn Muḥammad (29) (1420-1482)	BZ : III, 196 ; DL : VI, 296-7
Shihāb al-Dīn Aḥmad (30) (1393/4-1435)	DL : II, 102 ; IG : VIII, 359
Bahā' al-Dīn Muḥammad (31) (1393-1474)	DL : VIII, 62-3
Walī al-Dīn Aḥmad (32) (1409, 1411/2-1461)	DL : II, 188-90 ; NZ : XVI, 313-4
<i>Umm al-Ḥasan</i> (33) (1426/7頃-?)	DL : XII, 137-8
Faṭḥ al-Dīn Abū al-Ghayth Muḥammad (34) (1431/2頃-1457)	DL : IX, 263
<i>Khadija</i> (35) (?-1489)	DL : XII, 31
<i>Ḥawwā'</i> (36)	DL : XII, 23
'Alā' al-Dīn 'Alī (37) (1402-1478)	DL : V, 310-1
Shihāb al-Dīn Aḥmad (38) (1406-1476)	DL : II, 119-20
Badr al-Dīn Abū al-Sa'ādāt Muḥammad (39) (1417/8-1485)	DL : IX, 95-100 ; DR : 322-42
<i>Janna</i> (40) (?-1491/2)	DL : XII, 14
<i>Bilqīs</i> (41) (?-1480)	DL : XII, 17-8
Badr al-Dīn al-Makīnī (42) (1438-1510)	BZ : IV, 188 ; DL : VII, 58
Badr al-Dīn Muḥammad (43)	DL : IX, 3
'Izz al-Dīn 'Abd al-'Azīz (44) (1421-1483)	DL : IV, 228
Şadr al-Dīn Muḥammad (45) (1379-1435)	DL : VIII, 106-7
<i>Zuhūr</i> (46)	DL : XII, 38
Ja'lāl al-Dīn 'Abd al-Raḥmān (47) (1430-1462)	DL : IV, 102-3
<i>Alif</i> (48) (?-1473)	DL : XII, 8
Kamāl al-Dīn Muḥammad (49) (1436-?)	DL : IX, 17
Badr al-Dīn Muḥammad (50) (1432-1487)	DL : VII, 70-1
Zayn al-Dīn 'Abd al-Bāsiṭ (51) (1466-?)	DL : IV, 28-9
Shihāb al-Dīn Aḥmad (52) (?-1451)	DL : II, 33

表2 ブルキーニー家の成員の経歴に関する典拠
(生没年のわかる者についてはそれを示し、女性の成員の名はイタリックとした)

Nāšīr al-Dīn Muḥammad (1) (1315/6-1401/2)	DL: VII, 244; IG: V, 47-8
Abū Bakr (2) (?-1371/2)	IG: I, 24-5
Sirāj al-Dīn ‘Umar (3) (1324-1403)	DL: VI, 85-90; IG: V, 107-9; KS: III, 1108; TS: IV, 36-43
Badr al-Dīn Abū al-Yaman Muḥammad (4) (1355頃-1389)	DK: IV, 105; IG: II, 376; KS: III, 687-8; TS: III, 171-3; Wiet: No. 2288
Jalāl al-Dīn ‘Abd al-Raḥmān (5) (1361/2-1421)	DL: IV, 106-13; IG: VII, 440-1; KS: IV, 600; MS: VII, 197-203; NZ: XIV, 237-8; RI: 332-6; TS: IV, 87-9
‘Alam al-Dīn Ṣāliḥ (6) (1388/9-1464)	DL: III, 312-4; DR: 155-84; MS: VI, 327-9; NZ: XVI, 333; RI: 256-9
Ḍiyā’ al-Dīn ‘Abd al-Khālīq (7) (1390/1-1464)	DL: IV, 40-1
Muḥī al-Dīn ‘Alī (8)	DL: V, 266
Bahā’ al-Dīn Raslān (9) (1355-1400/1)	DL: III, 225; IG: IV, 277-8; MS: V, 351; TS: IV, 23-4
Shihāb al-Dīn Aḥmad (10) (1365/6-1440)	DL: I, 253-4; IG: IX, 137-8; KS: IV, 1231; MS: I, 226
Ja’far (11)	DL: III, 70
Nāšīr al-Dīn Muḥammad (12)	DL: VII, 167-8
‘Izz al-Dīn ‘Abd al-‘Azīz (13) (?-1419)	DL: IV, 232-3; IG: VII, 367; KS: IV, 515; MS: VII, 268
Zaynab (14) (?-1424)	DL: XII, 41
Bilqīs (15) (?-1438)	DL: XII, 14; IG: IX, 20
Taqī al-Dīn Muḥammad (16) (1387-1435)	DL: IX, 171; IG: VIII, 367-8; Wiet: No. 2350
Janna (17)	DL: XII, 18
‘Azīza (18) (?-1420)	DL: XII, 82
Tāj al-Dīn Muḥammad (19) (1385-1451)	DL: VII, 294-5; NZ: XVI, 6; Wiet: No. 2180
Zayn al-Dīn Qāsīm (20) (1393-1457)	DL: VI, 181-2; NZ: XVI, 188-9; Wiet: No. 1807
Fāṭīma (21) (?-1473)	DL: XII, 93-4
Zaynab (22) (1414/5 ?-1491)	DL: XII, 41
Ṣalāḥ al-Dīn al-Makīnī (23) (1418-1476)	BZ: III, 120; DL: II, 99-101; DR: 94-104

人見出すことができる。そのうちの一人は、一五一七年にイスタンブルへ移住したシャーフィイー派ナイブたちの中にその名が見える Badr al-Din al-Budini という人物である [V, 229] が、彼は Badr al-Din Muhammad (43) であった可能性がある。しかしいずれにしても、今回参照した限りの史料において、これを最後に同家に関する情報は全く見られなくなる。マムルーク朝の終焉と時を同じくして、エジプトにおいてブルキーニー家から要職を占める人物が出ることはなくなったようである。

2 シフナ家^②

彼らの中で最も古くその活動を確認すべきなのは、Husam al-Din Mahmūd b. Ghazi である。彼はアイニープ朝時代にアレクソポの shihna 職に就いていたが、そのために彼の子孫が Ibn al-Shihna と呼ばれるようになったという。以後、彼の孫にあたる Kamāl al-Din Muhammad からその系譜を辿ることが可能となる。

1. Kamāl al-Din Muhammad (I)

アレクソポにおいてファトワーを出し、講義を行い、一三七四年に没したという。また息子 'Alī' al-Din 'Alī (III) が彼のナイーブをしたとあること [DL: VI, 20] から、アレクソポのハナフィー派大カーディーを務めた可能性もある。

2. Muhibb al-Din Abū al-Walīd Muhammad (II) (HF, 11)

一三四八／九年アレクソポで生まれる。最初の教育を父親やアレクソポのウラマーから受けた後、父のすすめでダマスクス、カイロへ行き、それらの町のウラマーの下で学んだ。父の死後はカイロの al-Madrasa al-Sarḡhatmishīya [KM: II, 403-5] で暮らしたという。

一三七六／七年アレクソポのハナフィー派大カーディーに就任するが、わずかの期間で解任となる [KS: III, 294]。ついで一三七七／八年に再任されるが、数カ月で再び解任され [KS: III, 325]、以後一三九一年まづに四回同職に就任している。^③

一三九一年に解任されたのは、スルタン Barquq に敵対する勢力を支援したかどで処刑されたアレッポの太守 (caid)、Yalbugha al-Nasiri^⑤ に連座して投獄されたことが理由である。まもなく釈放されて三年間ほどカイロに留まった後、アレッポへ帰り、勉学と著述に打ち込んだという。一四〇〇年、アレッポを占領したティムールと同地のウラマーの代表の一人として会見し、住民の安全を求めたが、結局それは認められなかった。この後、一四〇六年にスルタン Faraj (在位一三九九—一四〇五年、一四〇五—一四〇九年) によってアレッポの大カーディーに任じられたとする年代記もある [IG: VII, 96] が、いつ解任されたかは確認できない。また、al-Maqrizi は一四〇九年、Ibn Taghri Birdi は一四一一年に彼がダマスカスの大カーディーに任命されたと記し [KS: IV, 114; Viet: No. 2388]、Ibn Hajar や al-Sakhāwī も時期を特定していないが、同様のことを記している。但し、ダマスカスのカーディー列伝に彼の名は見えず、またその解任時期も不明である。そして一四一一年、今度は反乱を起した Mu'ayyad Shaykh (後のスルタン、在位一四二二—一四二三年) に与つてたためにカイロで投獄された [KS: IV, 157] が、釈放後はカイロで Madrasa al-Jamaliyya の法学の教授職などいくつかの職に就いた。翌年、スルタン Faraj が彼をエジプトの大カーディーに任命。前任の Nasir al-Din Ibn al-'Adim (Hf. 8) が反乱者の Mu'ayyad Shaykh の側についたからであった。しかしながら、まもなく Faraj が代わってカリフ al-Musta'in (在位一四二二—一四二三年) がスルタンに即位し、彼は実務につかないまま解任された。その後アレッポへ戻り、一四二二年七月二日に死去した。

彼によって、出身地のアレッポだけでなく、カイロにおいてもシフナ家が活動する端緒が開かれたのであった。

⑤ Muhibb al-Din Abū al-Faḍl Muhammad (W) (Hf. 21)

一四〇二年二月一五日アレッポで誕生。アレッポ、ダマスカス、カイロなどで学ぶ。最初に就いた職は、父から譲り受けたアレッポの Masjid Ashiqtimur [DM: 167], al-Madrasa al-Jurdiyya [DM: 283], al-Hallūwīyya [DM: 285-6], al-Shadhbakhtīyya [DM: 284-5] それぞれの法学の教授職と、兄 Awḥad al-Din 'Abd al-Latīf (Y) と共同で担った。

その後一四二七／八年頃アレクポの qadi al-'askar に任じられ、一四三三年から四二年まで同地の大カーディーを務めた。一四四五年同職に再任されたが、このとき同時に katib al-sirr, nazir al-jaysh にも任命された [NZ: XV, 366]。これらは、エジプトの nazir al-khass 〇 Jamāl al-Din Ibn Kātib Jakam [NZ: XV, 366]、または舅 Walī al-Din al-Safī (Sh. 38) 〇 [DL: IX, 298; DR: 367] のマハムマド・ドゥ・金の名を冠したのたどらう。彼はまた、Walī al-Dīn al-Safī の娘と結婚するに前じ、師の一人ひまの 'Alā' al-Dīn Ibn Khaṭīb al-Nāsiriyya の娘と結婚してあり、彼から al-Madrasa al-Jawūliyya [DM: 282], al-Haddādiyya [DM: 283] の法学の教授職をも得ていた。さらに加えて nazir al-qa'ā, Jamī' al-kabir の管理人 [SA: IV, 220; Popper: 108] とシラーブを兼任し、「アレクポのことはすべて彼の裁量にまかされるやうになった」 [DL: IX, 298] と評されるほどだった。

そんな彼が次になろうとしたのはエジプトの katib al-sirr だ。一四五二年そのためにカイロに赴くが、反対にあってアレクポの katib al-sirr と nazir al-jaysh 職から罷免され、アレクポへ追返された [NZ: XV, 444]。そしてさらにその三カ月後にはアレクポの大カーディー職も失うことになった [NZ: XV, 448]。それでも彼は翌年再びカイロへ行き、激しく獄官運動を行った末、一千 dn とおの二千 dn とおろされる金を用いて、漸くエジプトの katib al-sirr に就任した [DR: 369; NZ: XVI, 71]。しかし、反対者のために半年後の一四五四年には同職を解任され [BZ: II, 320]、エルサレムへ追放の身となった。一四五八年許されてアレクポに帰還。無職となった彼は、翌年またカイロへ行き、今度も多額の金を使ってエジプトの katib al-sirr 職に復帰し [DL: IX, 299; NZ: XVI, 129]、孫 Lisān al-Dīn Ahmad (XV) をその代理 (nā'ib) に任命した。

一四六二年エジプトの大カーディーに任命されたが、katib al-sirr 職からは兼任を許されずに解任された。これを含めて以後、計三回、約九年間大カーディーとなった。その他カイロでは、大カーディー在職時の一四六七年に得た al-Jamī' al-Mu'ayyadīyya のシラーブ講師の職、一四七七年に任じられた Khānqāh al-Shaykhūniyya [KM: 313, 421] のシヤ

ン職 [BZ: III, 134] のほか、al-Madrasa al-Barguqiyya のシャイン職なども担当した。一四八五年二月二日病没。

シンナ家は、彼の活動によってマレクポからカイロへと本格的に進出することになったが、その拠点は依然アレクソに置いていたようである。al-ʿIbbākh ʿAbū al-Fadi のワタフ文書について伝えられている [IN: V, 311-2] が、それによると、彼はアレクソの町内外に多数のワタフ物件を所有し、その収益は数千 *da* に上るといふ。そして、その文書は一四五〇一年に記された後、一四七二—三年に書き加えられているといふことである。したがって、Abū al-Fadi はカイロに出てきてからも、アレクソで財産を築いていたことがわかる。

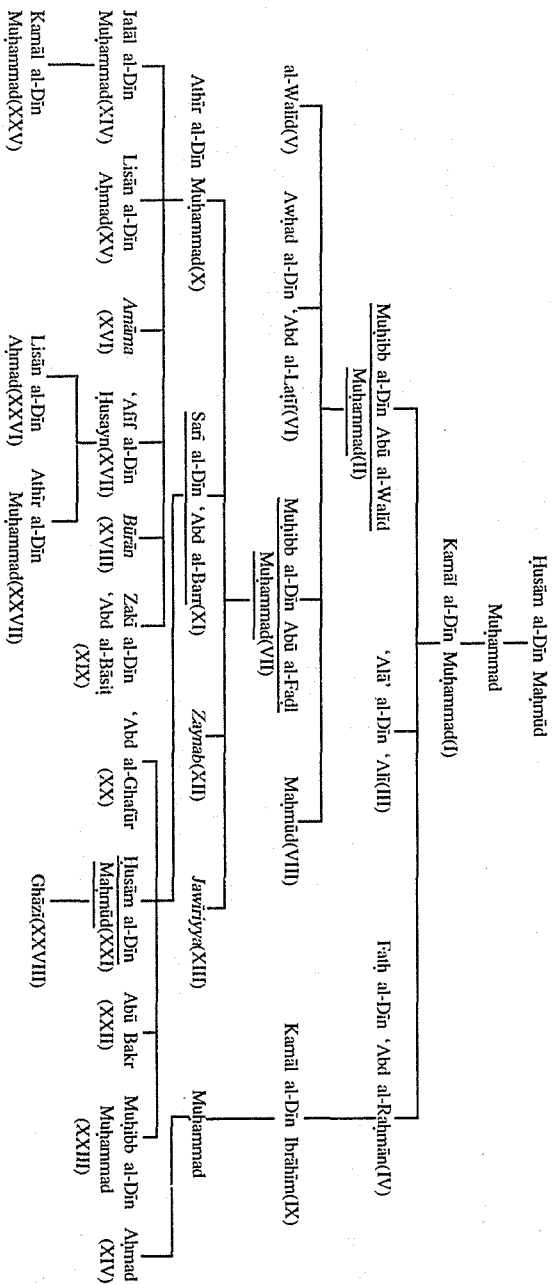
4. Sari al-Din ʿAbd al-Barr (XI) (Hf. 31)

一四四八年一月一六日マレクポで生まれる。父や、その他カイロやエルサレムのウラマーに師事した。その後、時期は不明だが、マレクポの al-Madrasa al-Shādhbakhitiyya の法学の教授職などを父から引き継ぐ。兄 Athir al-Din Muhammad (X) と共に担当した [DM: 282]。

カイロでは、父のナーインや、父の肝煎りや任じられた [DR: 382] とする al-Madrasa al-Sarghatmishiyya の助手 (*muʿrid*) のほかにも、Jamīʿ al-Ḥākim [KM: II, 277-82] のシヤイン、Madrasa al-Jamaliyya のタンシールの講師などを務めた。父の死後は、al-Jamīʿ al-Muʿayyadiyya のシヤイン、Khanṭān 講師の職、Khanqah al-Shaykhūniyya のシャイン職を継いだ。一五〇一年エジプトの大カーディーに就任 [BZ: III, 466]。すぐに解任される [BZ: III, 471] が、約三カ月後に再任される [BZ: IV, 7]。一五一四年まで在職した [BZ: IV, 350]。また、この間の一五〇八年には al-Madrasa al-Sarghatmishiyya のシャインに任命されてもいる [BZ: IV, 135]。一五一五年九月死去。

5. Husām al-Din Mahmūd (X) (Hf. 35)

生年は不明だが、カイロで生まれたといふ [GKS: I, 305]。一五一〇年頃^④アレクソの大カーディーを務め、一五一五年三千 *da* の金を積んでエジプトの大カーディーに任命された。Ibn Iyas によれば、このとき彼はまだ若くて大カーディー



シフナ族系図

一にふさわしいとはいえないが、金でスルタンに取り入ったことである [BZ: IV, 477]。

一五一六年マルジニ・ダービクの戦でマムルーク朝がオスマン朝に敗北した際、従軍していた四人の大カーディーたちの中で彼だけがカイロへ逃げ帰り、セリム一世がカイロへ入った後も大カーディーの地位に留まることを許された [BZ: V, 165] が、一五一七年マムルーク朝に対する和平の返書を持っていく途中で、弟 Abu Bakr (XXII) と共に殺害されたとする [BZ: V, 173]。

表3 シフナ家の成員の経歴に関する典拠（凡例は表2に同じ）

Kamāl al-Dīn Muḥammad (I) (?-1374)	DK : IV, 238; IN : V, 59
Muḥibb al-Dīn Abū al-Walīd Muḥammad (II) (1348/9-1412)	DL : X, 3-6; DR : 406-28; IG : VII, 95-7; IN : V, 158-61; KS : IV, 254; Wiet : No. 2388
'Alā' al-Dīn 'Alī (III) (1355-1427/8)	DL : VI, 20; IN : V, 180-1
Faṭḥ al-Dīn 'Abd al-Raḥmān (IV) (1352/3-1426)	DL : IV, 150; IG : VIII, 128-9; IN : V, 178-9
al-Walīd (V) (?-1400)	DL : X; 210
Awḥad al-Dīn 'Abd al-Laṭīf (VI) (1386-1429/30)	DL : IV, 338
Muḥibb al-Dīn Abū al-Faḍl Muḥammad (VII) (1402-1485)	BZ : III, 214; DH : II, 104-15; DL : IX, 295-305; DR : 357-406; IN : V, 298-313
Maḥmūd (VIII)	DM : 278
Kamāl al-Dīn Ibrāhīm (IX)	DL : I, 65
Aṭḥir al-Dīn Muḥammad (X) (1421-1492/3)	DH : II, 322; DL : IX, 295; IN : V, 321
Sarī al-Dīn 'Abd al-Barr (XI) (1448-1515)	BZ : IV, 470; DL : IV, 33-5; GKS : I, 219-21; IN : V, 358-60; SD : VIII, 98-100
Zaynab (XII) (?-1491/2)	DL : XII, 49-50
Jawāriyya (XIII)	DL : XII, 19
Jalāl al-Dīn Muḥammad (XIV) (1438-1486)	BZ : III, 243-4; DH : II, 122-8; DL : IX, 294-5; IN : V, 313-4
Lisān al-Dīn Aḥmad (XV) (1440/1-1477)	DH : I, 122-7; DL : II, 194; IN : V, 278-9
Amāma (XVI) (1440-1532/3)	DH : I, 331-9
'Alif al-Dīn Ḥusayn (XVII) (1454-1504/5, 1510/1)	DH : I, 547-8; DL : III, 158; IN : V, 352-3; GKS : I, 184
Bārān (XVIII) (1456/7-1531/2)	DH : I, 403-6; IN : V, 452-3; GKS : II, 129
Zakī al-Dīn 'Abd al-Bāsiṭ (XIX) (1472/3-1497/8)	DH : I, 731-9; IN : V, 338-9; GKS : I, 219
'Abd al-Ghafūr (XX) (?-1477)	DL : IV, 244
Ḥusām al-Dīn Maḥmūd (XXI) (?-1517)	BZ : V, 173; DH : II, 444-5; IN : V, 373-4; GKS : I, 305
Abū Bakr (XXII) (?-1517)	DH : I, 386-7; IN : V, 372
Muḥibb al-Dīn Muḥammad (XXIII) (?-1544)	DH : II, 256-8; IN : V, 500-1; GKS : II, 40; SD : VIII, 290-1
Aḥmad (XXIV) (?-1529/30)	DH : I, 271-4; IN : V, 442-3
Kamāl al-Dīn Muḥammad (XXV) (?-1491/2)	DH : II, 326-7
Lisān al-Dīn Aḥmad (XXVI)	DH : I, 279-80
Aṭḥir al-Dīn Muḥammad (XXVII) (?-1529/30)	DH : II, 157; IN : V, 442
Ghāzī (XXVIII) (?-1552/3)	DH : II, 6

その後、参照した史料から窺う限り、同家の成員がカイロへ出てくることはなく、活動範囲はアレクサンドリアに限られている。またその活動も概ね低調である。そして一五五一—二二年に没した Ghazi (XXIII) を最後に、この家系の消息は途絶える。シフナ家の華々しい歴史も、マムルーク朝時代とともに終わりを告げたといえよう。

以上、ブルキーニー家、シフナ家はともに一四世紀末からマムルーク朝が滅亡する一六世紀初頭にかけて大カーディーを輩出する有力な家系であり続けた。ここでその経歴と活動を紹介したのは、主に両家の中で大カーディーに就任した者であったが、彼らにほぼ共通しているのは、まず父親や兄、おじなどについて学んだ後、それらの親族から継承した、あるいは斡旋してもらった職を足がかりとして出世していったということである。特に親族関係を通じて職や地位を得られたことは、彼らの経歴上重要な意味を持ったと考えられるが、次にこの点をそれぞれの家系についてさらに詳しく見てみよう。

- ① この家系については、Petry が系図を付し、数人の成員の略歴を紹介しており [Petry 1981: 232-40]、参考になるが、誤りや疑問に思われる点が少なからず。本稿添付の系図はこの Petry の系図をもとに、あらためて諸史料を参照して作成し直したものである。
- ② 成員の経歴の典拠については表 2 参照のこと。名前の後に付した数字は系図上の番号と対応している。シフナ家についても同様である (典拠については表 2 参照)。
- ③ Taqi al-Din 'Ali b. 'Abd al-Karī al-Sabki. 一二八四—一三五五年。タマスタスのシャーフィイー派大カーディーなどを務めた。彼の経歴については、近藤真美「大カーディー、タキエニッディーン・ヌブキー——その生涯と司法活動——」『西南アジア研究』四二(一九九五)で詳しく紹介されている。
- ④ 'Izz al-Din 'Abd al-'Aziz b. Muhammad Ibn Janāra. 一二九四—一三六六年。一三四〇—六五年の間、途中一ヶ月半ほどの中断があるが、シャーフィイー派大カーディーを務めた [Escovitz 1984: *passim*; Saibī 1957: 85; Saibī 1958: 101-2]。
- ⑤ Bahr al-Din 'Abd Allah b. 'Abd al-Rahman Ibn 'Aqil. 一二九四—一三〇一年生まれ。一三五八年に一ヶ月半ほどの間シャーフィイー派大カーディーに任じられた。一三六七年没 [DK: II, 267-9; RI: 284-5; TS: III, 96-8; Wiet: No. 1320; Saibī 1957: 85]。
- ⑥ 各法学派から一人、計四人が任命され、その職務は dar al-'adl に持ち込まれる問題についてフアトワー (Fatwā) を出すことであつた [Martel-Thouminian: 437; Popper: 100]。
- ⑦ その職務 (mawā'id) はムスルタンの遠征の際に法的規定について審理することであり、[就任者は] dar al-'adl に占めるべき座席を有している。qādi al-'askar は各法学派から一人、[計]四人であることが

通例であった」[SA: XI, 204]。また、ムハンマド派の qādi al-ʿaskar

やムハンマド派 [Martel-Thoumian: 437; Popper: 100] の支配もよくある。それらをめぐって、先に引用した部分と矛盾するが、同じ SA の「彼らはムハンマド派、ムハンマド派、ペーリヤ派の三人である」ムハンマド派は「[IV, 46]」ムハンマド派と書かれたり、ムハンマド派とも書かれたり、ムハンマド派の職に就いた者も、ムハンマド派の qādi al-ʿaskar となったムハンマド派 [Ayalon, D., “Studies on the Structure of the Mamluk Army III”, *BSOAS*, 16-1 (1954) (以下、Ayalon と表記)] 67]。

- ⑧ KM では “al-Khānqān al-Zahiriyya” と記されている。ペーリヤン朝時代、jami, madrasa, khānqāh など、師範の相違は、必ずしもその機能の相違を対比してはならない [Behrens-Abouseif, D., “Change in Function and Form of Mamluk Religious Institutions”, *Annals Islamologique*, 21 (1985); Little, D. P., The Nature of Khānqāhs, Ribāʿihs, and Zawiya under the Mamluks, *Islamic Studies Presented to Charles J. Adams*, eds. Hallaq, W. and D. P. Little, Leiden, 1991]。本稿では概ね DL など人名辞典中の記載を採用した。また、ムハンマド派 al-Madrasa al-Barghiyya と呼ばれる施設に関しては、Mostafa, S. I., *Madrasa, ḡanqāh wa Masoleen des Barghiq in Kayro*, Glückstadt, 1982 など、専門がある。
- ⑨ 最も権威あるムハンマド派を出すムハンマド派に付けられた尊称 [Popper: 100]。但し、Popper が言うように大カーディーだけがこの尊称を付けて呼ばれるのだったこと、この例から明らかである。
- ⑩ 森本公誠訳『歴史序説』三巻（岩波書店、一九七九—一七八七）第三

巻九二四。

- ⑪ ‘Ali Bāstāh Mudārak 以下、ムハンマド派の毎年 Umar (3) と Šālih

(5) の誕生祭 (mawlid) を行われたり、ムハンマド派の [al-Khiḍīr al-Tawfiqiyya al-Jadida li-Miṣr al-Qāhira wa Madīnat wa Biḍ-ḍhā al-Qāhira wa-l-Shūḥra, 7 vols., al-Qāhira, 1980-1987, IV, 139]。

- ⑫ ヲの問題に因縁して、Petry 以下の家系が土地を保有して来たことをめぐり、Petry 1981: 233] など、特に史料的な根拠は確かならな

- ⑬ Zayn al-Dīn ‘Abd al-Rahīm b. al-Ḥusayn al-Trāqī. 一三三三—一四〇四。ムハンマド派の前身となるムハンマド派 [DL: IV, 171-8; IG: V, 170-6; MS: VII, 45-50; TS: IV, 29-33]。

- ⑭ Taqī al-Dīn ‘Abd al-Wahhāb b. ‘Alī al-Subkī. 一三三三—一三九九年。前掲の Taqī al-Dīn al-Subkī 註⑧の息子で *Tabaqat al-Shāfiʿiyya al-Kubrā, Muṭā al-Niʿam* など、著書もいくつかある。

- ⑮ ヲの職に就く者、diwan al-īshāʿiyya katib al-sirr として働く官僚であるが、その職務は dar al-ʿadīyāt にも関わっていることを読み上げ、スルタンの下した判決を筆記するところから、Petry [Martel-Thoumian: 44-5; Popper: 97]、法廷の職に就くムハンマド派である。

- ⑯ ヲは、Junnāda II 月（一四〇一—一四〇二）の諺に登場する。次のように、Junnāda II 月など、Petry [RI: 333]、DL では Junnāda II 月四日と訂正されている [108]。また、IG では同様の、KS では同月五日と記されている [IG: V, 8-9; KS: III, 1082-3]。

- ⑰ ヲは、一四〇四年 [DL: III, 280-1; MS: VI, 132-4]。amir akhar とは、スルタンの邸舎の管理を担当し、高位のムハンマド派が任命される

職せられた [Ayalon: 63; Marei-Thoumian: 439; Popper: 92]。

㉒ 一四〇十年 [DL: III, 76; MS: IV, 313-24]。dawadar al-kaahir 及びムスリム朝後期には高位の官職であるムスリムの命令の執行を監督するなどの行政を統括した [Ayalon: 62-3; Marei-Thoumian: 439; Popper: 92]。

㉓ MS は大ナーナーヤのヤハヤの職について qadi al-'askar に兼任したと記述している [VII, 198-9]。Perry 著、アヤヤの日記及び依拠したたると見ると、同様の職を記述している [Perry 1981: 233]。なお、NZ はこの点正しく記述している [XIV, 258]。

㉔ 一三二一—一四四九年。本稿で利用した DK, IG, RI の著者。彼は「al-Sakhāwī による彼の伝記 *al-Jawāhir wa-l-Durar fi Tariqat Shaykh al-Islām Ibn Hajar* を含む史料によつて、その生涯を扱った Kawash, S. Kh., "Ibn Hajar al-Asqalāni (1372-1449 A. D.): A Study of the Background, Education, and Career of 'Alim in Egypt," Ph. D. diss. Princeton University, 1969 を参照。

㉕ 一三六一—一四三三年。前掲 Zayn al-Dīn al-Jāqī 注㉓の順序 [DL: I, 336-44; IG: VIII, 21-2; MS: I, 332-5; RI: 81-3; TS: IV, 80-2]。

㉖ DL はこのほかにも、Salih がモロッコに滞在し二〇年（一四一七—一四三〇）以前に Ibn Abī al-Faḥ al-Bulqīni なる人物が al-Madrasa al-Malikiyya の法学の教授職を譲り受けたと記述している。この人物が誰のことを指すのか特定は出来な。Salih はこの以前に同職を保持していたとの記載があるのは、Abd al-Rahmān 以外には見当たらない。この現段階では彼の可能性が最も高く考えられるが、結論は保留して置きたい。

㉗ 一三六五—一四三六年 [DL: VIII, 151-4; IG: VIII, 113; KS: IV, 732; Rīa: 119b; Rīb: 135b-136a; TS: IV, 104-5; Viet: No.

2247]。

㉘ 一三六九—一四二四—五年 [DL: VI, 34-6; DR: 189-95; IG: VIII, 86-8; KS: IV, 701; RI: 404; Viet: No. 1666]。

㉙ 一四三五年 [DL: VI, 222; Viet: No. 1862]。

㉚ 'Aḥm al-Dīn Dā'ūd b. 'Abd al-Rahmān Ibn al-Kuwayz. 一四三三年 [Marei-Thoumian: 241, et al.]。

㉛ al-Maqrīzī 著、ワレの推測者による同書触れ、'Aḥm al-Kuwayz. [KS: IV, 623] と記す。その命令は、アヤヤの Abd al-Rahmān の命令と同じく、推測者に対して示されたものである。

㉜ Ibn Hajar は *al-Sakhāwī* の知見による。「彼の二回目の在任時に、学生のためであった (quddīra)。アヤヤは彼は遺産から財産を得ることを（遺贈）を統制し、布告を出して、一般に人は死ぬ際に自分の自由になるものを遺贈するから、遺贈者を両都に送り遺贈する権利は、[それ以外の] 遺贈の証言によるもの、証言 (khunūṭ al-khāf) を証人たすに書かせた。アヤヤは彼は禁煙者 (naqīb) を派遣し、遺贈されたものを徴取したが、両都の人々はアヤヤが「アヤヤの私に見たアヤヤは、アヤヤの村 (Balda) からのわずかな額以外に、両都の届くところにはなかった。その額は、銀四〇〇ディナールであったが、前掲の一冊からたすびも金でその十倍はアヤヤに得られたはずである」 [RI: 258-9]。

㉝ Berkeley, J., *The Transmission of Knowledge in Medieval Cairo*, Princeton, 1982 (訳作 Berkeley の略記), 105; DL: IV, 201.

㉞ その名の通り、巡礼に関わる行事をアヤヤの役目を担った。cf. Schimmel, A., "Some Glimpses of Religious Life in Egypt during the Late Mamlūk Period," *JG*, 4 (1965); 'Ankawi, A., "The Pilgrimage to Mecca in Mamlūk Times," *Arabian Studies*,

- 1 (1974).
- ① もう一人は、一五一六年にスルタンがシリブの遠征に伴った蕃のリストにハナフー派サーイブとして名前の蕃がつけられた Sharaf al-Din al-Balqini [BZ: V, 42] なる者である。今回検討した限り、マンキーニー家にハナフー派の者は見当たらないこと、系譜上に全く位置づけられないことから、違う家系の人間であった可能性が高い。
- ② この家系については、太田氏がその系図と典拠を示し [DM: 400-1] (この刊本ではムーンジ数が算用数字とアラビックによる数字の両方を示されているが、以下参照に際しては算用数字のムーンジ数を挙げることにする) また主に年代記から得られる情報をもとにして Schimmel が五名の成員 ((VII), (XI), (XIV), (XVII), (XXXI)) の経歴を紹介している [Schimmel 1943: 93-122] のページを参考とした。
- ③ 太田敦子「Ibn al-Shihna のマハボ史についての研究」『オリエント』三二—二(一九八九)。
- ④ 任期はそれぞれ次の通り。一三八四年九月 [KS: III, 519] から数か月間(解任時期不明)、一三八五—六年から一三八六年一—二月まで [G: II, 130; KS: III, 537, 554]、一三八八年二月から八九年一〇—十一月まで [G: II, 292; KS: III, 556, 665]、就任時期は不明だが一九一一年五月まで [G: III, 69; KS: III, 737-8]、それぞれ。
- ⑤ 一—一九一一年 [DK: IV, 440-2; Wiet: No. 2677]。
- ⑥ Ibn Tulūn, *Quḍāt al-Dīnashq*, Dīnashq, 1956。
- ⑦ 一三九〇—一四一六年 [DL: VIII, 235-6; DR: 303-6; IG: VII, 235-6; NZ: XIV, 143; Wiet: No. 2291]。
- ⑧ この人物については、マレポの地誌、地方史である DM の著者として、その生涯が太田氏によって主に DL に基づき紹介されている [DM: 408-16] のページを参考とした。
- ⑨ イスターの分配管理を司る職掌とする *diwān al-jaysh* の長 [Popper: 107; Ayalon: 66; Martel-Thoumian: 48-9]。
- ⑩ Jamāl al-Dīn Yūsuf b. ‘Abd al-Karīm Ibn Kaṭīb Jākām. 一四一六—七—一四五八年 [Martel-Thoumian: 285, et al.]. *nāzīr al-khāṣ* は、もとは遠征費用の調達や、祭のときの供物、スルタンが授けするヒルン (khilā) の用意をすることなどを担当していたが、次第に権限を縮小され、ヒルンを用意することだけがその職務となった [Martel-Thoumian: 49-53; Popper: 97]。なせ、なぜこのとき彼が Abū al-Faḍl を支援したかは不明である。この後、理由はわからないが、両者の関係は悪化し、彼は Abū al-Faḍl がエジプトの *katīb al-sirr* になるのに強く反対した。
- ⑪ 一三八八年または一三九三—四年誕生、一四五一年没 [DL: VII, 118-21; DR: 245-55; NZ: XV: 555-8; Wiet: No. 2054]。Abū al-Faḍl と結婚した彼の娘 *Alif b. ‘Abd al-Faḍl* [DL: XII, 8-9] を参照しよう。
- ⑫ ‘Alī b. al-Dīn ‘Alī b. Muḥammad Ibn Khaṭīb al-Nāṣiriyya. 一三七二—三一四四〇年。トリポリやマレポのシャーンイー派大カーディーなどを務めた人物 [DL: V, 303-7; Wiet: No. 1662]。またマハボ史 *al-Durr al-Muntahab fi Ta’rīḥi Mamṭaka Ḥalab* の著者として知られる「太田前掲論文」九〇。Abū al-Faḍl と結婚した彼の娘 *Khaḍīja b. ‘Abd al-Faḍl* [DL: XII, 29] を参照しよう。
- ⑬ これがいかなる職であるかはよくわからぬが、城塞を管理する *nātib al-qala* のことを指すのかも知れないが、それは普通四十人長 *ṣānān* のペトルータが就く職とされている [SA: IV, 217; Popper: 105]。
- ⑭ 人名辞典には、任期について何の言及もないが、BZ の九一六年 *Safar* 月(一五二〇年六月)の条に「その月の暮れ、スルタンは *Iṣmā‘ al-Dīn Maḥmūd* にヒルンをお与えになり (*ṭakhā’a*)、彼を *ḥamsūr* 病院の管理に任じた。…… [中略] ……」と *Maḥmūd* が

Badr al-Din [Mahmūd b. Muhammad Ibn Aġā] に後で自分が
レッキのシナフイー派のカーギー職に就けるやうに頼んでつたのだ
った。彼はわずかの期間それ(インスール病院の管理職)に留まった

が、解任された」[IV, 183] であるから、この後レッキの大カ
ーギーに任命されたのではないかと考えられる。但し、解任の時期
については不明である。

三 有力家系の動向(二)——職と地位

1 ブルキーニー家の場合

この家系が行っていた職の受け渡しの様子を端的に示す事例の一つは、一三七七年に Shiraj al-Din Umar (3) が大カ
ーギーに推薦された際に見られるものである。このとき Umar は息子 Abu al-Yaman (4) に qađi al-askar 職を
譲り、Abu al-Yaman は自分が就いていた tawqi' al-dast 職を弟 Abd al-Rahmān (5) に任せたとであった。

このようにしてこの家系の多くの成員が就いた職を、職ごとに整理して示せば以下の通りである。

(a) エジプトのシャーフイー派 qađi al-askar

'Umar (3) → Abu al-Yaman (4) → Abd al-Rahmān (5) → Taj al-Din Muhammad (19) → Abu al-Sa'ādāt (39) → Fath
al-Din Muhammad (26) → Badr al-Din al-Makini (42) に継承された。

このうち Abu al-Sa'ādāt (39) は Fath al-Din Muhammad (26) が、この職を継いだ Taj al-Din Muhammad
(19)、Abu al-Sa'ādāt (39) から直接引き継いだかどうかは定かたはなない。しかし、年代記においてこの間同職に就任し
たブルキーニー家以外の者は見当たらないので、彼らは百年以上にわたってこの職を独占していたと見える。

(b) ナーイブ

表4に示したように、大カーディーに就任した者が多くの親族を、法業務の経験を積む上で重要な意味を持ったこの職
に任命している。

㉔) Zāwīya al-Khashshābiyya の法廷の教授職

Bahā' al-Dīn Ibn 'Aqīl → 'Umar (3) → 'Abd al-Raḥmān (5) → Sāliḥ (6) → Faṭḥ al-Dīn Muḥammad (26), Abū al-Sa'ādāt (39) → Badr al-Dīn al-Makīnī (42)

㉕) Ribāt al-Āthār [KM: II, 429-30] の法廷の教授職

'Abd al-Raḥmān (5) → Tāj al-Dīn Muḥammad (19) → Shihāb al-Dīn Aḥmad (38) → Badr al-Dīn Muḥammad (50) → Zayn al-Dīn 'Abd al-Bāsīt (51)

これらのほかにも彼らが就けた教育に関係する職は数多いが、代々継承された例をゆらぎに挙げるなら、Madrasa Suddīn min Zāda の法廷の教授職や Jamī' Ibn Tūlūn, al-Madrasa al-Barqūqīyya などなど、タマンシームを教える職がとりわけ多かった。

2 シンナ家の場合

この家系についても、職ごとに就任した者を整理して示すと次のようになる。

㉖) アレクソのシナノイー派大カーディー

同家でこれに就任したのは人名を数える。就任したことが推測される Kamāl al-Dīn Muḥammad (I) を含め、Abū al-Walīd (II), Abū al-Faḍl (III), Athīr al-Dīn Muḥammad (X), Lisān al-Dīn Aḥmad (XV), Ḥusām al-Dīn Maḥmūd (XX) など、Abū al-Faḍl, Athīr al-Dīn Muḥammad, Lisān al-Dīn Aḥmad は總十二代ほどの職を担ったことになる。

㉗) アレクソのマールク派大カーディーとシャーフイイー派大カーディー

シンナ家はそもそもシナノイー派であるが、Faṭḥ al-Dīn 'Abd al-Raḥmān (IV) はテムールのシリブ侵攻後マール

ク派に転じ、一四二一／二年頃同派の大カーディーに就任した。彼の死後、息子 Kanāl al-Dīn Ibrāhīm (IX) がおやらくこれを継いだと思われる。^⑤

やらにこの家系の中にはシャーフイー派になった者もいた。そのことを確認できるのは Jalāl al-Dīn Muḥammad (XV), Afīf al-Dīn Husayn (XVI), Athīr al-Dīn Muḥammad (XXV) の三名である。このうち前二者がブンハッポのシャーフイー派大カーディーになった。^⑥ 但し両者の間でこの職の継承は行われていない。

ところで、彼らがハナフイー派からマールイク派やシャーフイー派に転向したのはなぜであろうか。Jalāl al-Dīn Muḥammad についでには、DL にその理由が記されている。

祖父が彼を彼らの法学派(ハナフイー派)から転向させてシャーフイー派とした。それは、彼がブンハッポの(シャーフイー派)カーディーになれば彼ら(一家)に対するシャーフイー派カーディーたちの圧力(munākaḍa)から解放されるからであった[IX, 294] すなわち反対勢力を牽制し、自らの家系の活動を拡大するためであったのである。あるいは、前述のようにAbū al-Walīd (II) や Abū al-Faḍl (III) が投獄されたり、追放されたりしたことがあって、ある親族がこのように咎を受けた場合に累を家系の全員に及ぼすことのないようにするための対応策であったかもしれない。いずれにせよ、他のシャーフイー派やマールイク派に転向した者も、これらと同じような意図があったと考えられよう。

(c) ブンハッポの katīb al-sirr

Abū al-Faḍl (VII) の後、息子 Athīr al-Dīn Muḥammad (X) と孫 Afīf al-Dīn Husayn (XVI) が同職に就いた。しかしその任期はどちらも不明で、両者ともそれぞれ親から直接この職を引き継いだわけではなかったようである。なお Athīr al-Dīn Muḥammad は、この職のほかにも父と同様ブンハッポの nāzīr al-jaysh と nāzīr al-qal'a にも就任したとされる。

(d) ナーイブ

表4に示したごとく、ブルキーニー家の場合ほど多くはないが、この家系でも大カーディーになった者がその子弟を同

職に任命してゐる。

② Jamī' al-Kabir のメンバー

'Alā' al-Dīn Ibn Khathīb al-Nāsiriyya → Abū al-Faḍl (III) → Athīr al-Dīn Muḥammad (X) → Zakī al-Dīn 'Abd al-Basīṭ (XX)

(f) al-Madrasa al-Shādhbakhṭiyya, al-Juridikiyya の法學の教授職

前者のホスマナビ Abū al-Walīd (II) → Abū al-Faḍl (III) → Athīr al-Dīn Muḥammad (X), Sari al-Dīn 'Abd al-Barr (XI) と引き継がれてゐた [DM: 284]。後者を Abū al-Faḍl が父のあとを継ぎ、その後息子（不明）に譲つたとゞゞゞとゞゞゞ [DM: 283]。

その他、この大きな宗教や教育に関わる職を親族間で継承したことのわかる例は、Abū al-Faḍl (III) が舅 'Alā' al-Dīn Ibn Khathīb al-Nāsiriyya のあとを継ぎ、息子（不明）に譲つたとゞゞゞとゞゞゞの al-Madrasa al-Haddādiyya の法學の教授職 [DM: 283]。また Sari al-Dīn 'Abd al-Barr (XI) が父 Abū al-Faḍl を継ぎ、就任したカイロの al-Jāmi' al-Mu'ayyadiyya のホトマイム講師の職、Khānqāh al-Shaykhūniyya のシャイン職などゞゞゞ。

以上、両家は、多少の相違はあるが、多くの職を家系内で継承、斡旋して保持してゐた。

相違は両家の職歴、法學派、活動範囲の面で見られる。ブルキーニー家の成員は、ほとんど法や教育関係の職にのみ携わり、全員シャーフィーイー派で、その活動範囲はほぼカイロと下エジプトに限られていた。それに対しシフナ家は、Khatīb al-Sirr̄ ya nāzīr al-Jaysh など官僚職にも携わり、ハナフィーイー派に属する者だけでなくマリック派やシャーフィーイー派に転向した者がおり、アレクソとカイロにまたがって活動していた。こうした相違は何に起因するのであろうか。そもそもシフナ家に限らず、今回検討した時期のハナフィーイー派大カーディー二四名中一六名がアレクソなどシリア地方の出身である。一方、ブルキーニー家のように、カイロを含むエジプト出身の大カーディーがエジプト以外で職に就いた例は少ない。

表4 ナーイブの任命者と被任命者

ブルキーニー家

任命者	被任命者
Bahā' al-Dīn Ibn 'Aqīl	Sirāj al-Dīn 'Umar (3)
Jalāl al-Dīn 'Abd al-Rahmān (5)	'Alam al-Dīn Šālīḥ (6) Shihāb al-Dīn Aḥmad (10) Tāj al-Dīn Muḥammad (19) Zayn al-Dīn Qāsim (20) Walī al-Dīn Muḥammad (28) Bahā' al-Dīn Muḥammad (31)
'Alam al-Dīn Šālīḥ (6)	Zayn al-Dīn Qāsim (19) Šalāḥ al-Dīn al-Makīnī (23) Bahā' al-Dīn Abū al-Baqā' Muḥammad (24) Walī al-Dīn Aḥmad (32) Shihāb al-Dīn Aḥmad (38) Badr al-Dīn Abū al-Sa'ādāt Muḥammad (39) Badr al-Dīn al-Makīnī (42) Jalāl al-Dīn 'Abd al-Rahmān (47) Badr al-Dīn Muḥammad (50)
Šalāḥ al-Dīn al-Makīnī (23)	Badr al-Dīn al-Makīnī (42)

シフナ家

(A=アレッポ, C=カイロ, でナーイブを務めたことを表す)

任命者	被任命者
Kamāl al-Dīn Muḥammad (I)?	'Alā' al-Dīn 'Alī (III) (A)
Muḥibb al-Dīn Abū al-Walīd (II)	'Alā' al-Dīn 'Alī (III) (A) Fath al-Dīn 'Abd al-Rahmān (IV) (A) (ハナフィー派)
Muḥibb al-Dīn Abū al-Faḍl (VII)	Athir al-Dīn Muḥammad (X) (A) Sari al-Dīn 'Abd al-Barr (XI) (C)
Sari al-Dīn 'Abd al-Barr (XI)	Muḥibb al-Dīn Muḥammad (XXIII) (C)

また職歴を見ると、ハナフィー派大カーディーが最も多く官僚職に携わった経験を持っている。以上から考えて、両家の相違はその出身地域や元来属する法学派の違いが反映したものであろう。^⑧

ともあれ、重要なのは、どちらの家系の成員も出身地域を活動の拠点として法や宗教・教育に関わる職に就くことを専らとし、^⑩それらの職を直系を軸に親族間で持続的に確保していたことである。そして、そのように親族関係を通じて得た職を足場に大カーディーに就任するまでに至った者は、親族をナーイブに任命するなど、その地位に伴う権益を利用してさらなる家系

の維持、発展に配慮したのであった。そのことがすなわち、両家のような有力家系が成立する要件であったといえよう。依拠した史料の性格上、彼らの経済的な基盤についてはなお不明な点が多いが、上述のごとき職から得られる俸給や利益が主たる収入源であったと考えられるからである。そうであったからこそ、彼らは早くから子弟の教育に当たり、身内から大カーディーに就任する者が出るように努めたのである。

① Fath al-Din Muhammad が、父 Salih の後任としてこの職を得たかは定かではないが、Salih の生前たまたまの事と見る [DL: VII, 269]。Salih の死後、既述の如く Abd al-Saradat が自分にも相続権のあることを主張して同職を得たが、彼の死の直前の同職は彼と Fath al-Din Muhammad が共同で受け持た、その後 Fath al-Din Muhammad が単独で担当した。

② 彼がこのポストに就いたかどうかは確認できないが、息子 Taj al-Din Muhammad (19) にそれを譲った (taḡhibā la-hu) とする [DL: VII, 295]。

③ この施設と関しては Berkeley がそのコプト文書を利用して様々な詳細な言及をする [Berkey: 70-3]。

④ それぞれの就任者を就任順に列挙すれば次の通り。

- Madrasa Sūdan min Zada: Taz al-Din 'Abd al-'Aziz (13) → Bahā' al-Din Muhammad (31) → Taz al-Din 'Abd al-'Aziz (44)
 Jamī' Ibn 'Uthmān: 'Umar (3) → 'Abd al-Rahmān (5) → Taj al-Din Muhammad (19), Zayn al-Din Qasim (20) (この二人は共同で担当) → Abū al-Sarādat (39)
 al-Madrasa al-Baḡdādiyya: 'Umar (3) → 'Abd al-Rahmān (5) → Salih (6) → Fath al-Din Muhammad (26), Abū al-Sarādat (39)
 (両者の就任形態は Zawiyā al-Khashābiyya の場合と同様 [注①参照])

⑤ Fath al-Din 'Abd al-Rahmān の死後のが八三〇年 Muḥarram 月八日 (一四二六年一月九日) Kamāl al-Din Ibrahim のこの職に就任したが八三二年 (一四二七年) 一〇月二日—一四二八年一〇月一〇日) とその間が一年ほどあるが、他の者が同職に就任した記事は見られないので、後者が前者のあとを継いだと考えて間違いないであろう。

⑥ Jalāl al-Din Muhammad の同職への就任は一四五七—八年前であったと見る [DL: IX, 299]。その後一四六六年に彼がこの職を解任されたという記事は BZ に見出せる [II, 445] が、それとこの職に就任したかどうかは不明である。一方 'Aḥīf al-Din Husayn については一四九五年の職に任命されたという記事がある [BZ: III, 306-7] が、この解任されたかは明らかではない。

⑦ DL では彼がこの職に就任したという記述はない。この職の nāzir al-Jaysh 及び nāzir al-Qaṭa'ā だったという記述もある [IX, 295]。一方 DH には kātib al-sirr 及び nāzir al-jaysh に就任したという [II, 322]。この二は両方の記述を折衷して採用する方がよいであろう。

⑧ この家の成員四名 (Husām al-Din Mahmūd (XXI) [Hf. 365] はカイロで生まれ育つが、この家がその職を拠点として持つことが、彼がその職を得たというよりもむしろその職の継承者として加えて、Hf. 1, 5, 7, 8, 13, 15, 17, 20, 22, 24, 27, 28 を示すように身であった。

⑨ 法学派の転向については、さらに検討を要するが、シフナ家のケー
スから類推すれば、シャーファイ一派に属する者とハナファイ一派に属
する者の置かれていた状況の違いが影響していたのではないかと考え
られる。当時最も優勢であったシャーファイ一派の者に他の法学派に
転向する積極的な理由はなかったであろう。また、ハナファイ派ウラ
マーの場合は、スルタンなどマムルークが同派に属していたために、
彼らと関係を持つことが多かったであろうが、それだけに、Abu al-
Walid (II) のように、彼らの争いの余波を受ける危険性も高かった
と思われるからである。

結びと今後の展望

ブルキーニー家とシフナ家という事例を通して明らかとなったように、大カーディーの有力家系の存立基盤は、その成
員が恵まれた教育環境に育ったことと親族による配慮や引き立てで容易に職を得られたことにあった。そして、親族が大
カーディー経験者のいる者がまた多く大カーディーに就任できたのも、それらが理由だったと考えられよう。Esowitz
が推測したように単に良い家柄の出身であったためではなく、もっと実質的なものだったのである。

このように親族関係は、大カーディー就任に至る過程で重要な意味を持っていた。もちろん、最初に見た通り、親族の
ツテを頼らないでも、才能が認められたり、賄賂や有力者とのコネを利用することによって、その地位に就いた者も多く
いた。しかし、従来いわれているほどには、ウラマーの社会的流動性 (social mobility) は高くなかったのではないだろう
か。Lapidus は、マムルーク朝時代には、政治的、経済的な不安定さ、ペストや飢饉による死亡率の高さなどのために、
ウラマーの社会的流動性を阻害するような有力家系が成立しにくく、三、四世代にわたって職が継承されることは稀であ
ったと論じている [Lapidus: 110]。また、三浦氏も「アラブ圏には、一時の権勢をふるう名家の存在はみられるが、百年

⑩ 両家の成員だけでなく、大カーディー就任者たちの経歴を見ても、
彼らが就いた職は概ね法関係や宗教・教育関係の職であり、官僚職に
携わることは少ない。一方、Maret-Thoumian によれば、法や宗教
に関係する職に就いた経歴を持つ官僚が多いという [Maret-Thou-
mian: 50-52]。彼女は、エジプトの大カーディーだけでなく、ムフタ
シフヤシリア地方の大カーディーなども考察の対象に含めて論じて
いるので、現段階で単純に比較することはできない。ウラマーと官僚
の関係は、今後検討すべき問題である。

以上持統することのほうが少ない^①と述べている。だが、ブルキーニー家やシフナ家は特に例外的な存在ではないのである。一四世紀末以前にもいくつかの有力な家系があったことは、既に述べた通りである。また、ダマスクスでもそのような家系が認められるという。したがって、両家のような有力家系が多くの職を専有していたことによって、ウラマーの社会的流動性はある程度抑制されていたと見ることができるだろう^②。

さらに、ブルキーニー家、シフナ家の事例や大カーディーの経歴から窺われるのは、こうしたいわば縦方向の社会的流動性だけでなく、横方向、すなわち空間的移動性も限られたものではなかったかということである。一般に、ウラマーは学問の師を求めて各地を遊学し、したがってその空間的移動性も高かったとされる。しかし、ブルキーニー家もシフナ家も出身地域を活動の拠点とし続けており——それは、*Salih* ⁽⁶⁾ がダマスクスに赴任することを拒否してエジプトの大カーディーにこだわったこと、*Abu al-Fadi* ⁽⁷⁾ がカイロへ出てきた後もアレクサンドリアで財産を形成していたことにも表れている——、また、先に触れたエジプト出身者に限らず、多くの大カーディーたちが就任前に地元でキャリアを積んでいる。すなわち、勉学のために遠く旅することはあっても、キャリアの追求という点からすると、地元志向が強かったと考えられないだろうか。

以上の見解は、限られた事例から得られたものである。今後、時代的にも地域的にも視野を広げ、さらに他の事例との比較、検討が必要であることはいうまでもない。それによって、ウラマーの社会的流動性、ひいては「幽霊のような観念」ともされるウラマーそのもののあり方がより明らかになるであろう。

① 三浦徹「ウラマー」『講座イスラーム世界別巻 イスラーム研究ハンドブック』（悠思社、一九九五年）、二五二。

② ダマスクスのカーディーの経歴を検討した Mandaville の前掲論文

の主旨もこの点にあった。また Berkeley も、父親の就いたマドラサの教授職を息子が相続する傾向にあったことから、同様の見解をとって *no* [Berkey: 127]。

（京都大学大学院生

The Social Background of Chief Judges of Egypt during the Late Mamlūk Period (14 th–16 th centuries)

by

ITO Takao

In 663/1265 the judicial system of Egypt was reformed under the Mamlūk rule: the four chief judgeships were established. Whereas previously there had only been a Shāfi'i chief judge, there were now chief judges for the Ḥanafīs, Mālikīs, and Ḥanbalīs as well. This reformed system remained intact until the early 16 th century when the Ottoman administration in Egypt imposed judicial changes.

Although many aspects of these chief judges have been analyzed, the means by which chief judges were appointed has been ignored. Namely, the careers of chief judges during the late Mamlūk period, from the end of the 14 th century to the early 16 th century, have not been fully examined yet.

The investigation of their careers makes it clear that the major reasons for an appointment to the chief judgeship of that era were (A) scholarly reputation, (B) succession of a deputy judge (*nā'ib*), (C) bribery, (D) patronage, (E) family connection, or some combination of them.

Of them family connection was the most important factor. Two influential families that produced a number of chief judges, the Banū al-Bulqīnī and the Banū al-Shiḥna, provide good examples. Both families held many judicial, religious and educational professions in their birth-places through several generations. The presence of these families reveals that the social mobility of the 'ulamā' was limited, contrary to the generally accepted view.